

# The Kansai University Bulletin

Osaka, November 15th, 1926—No. 44

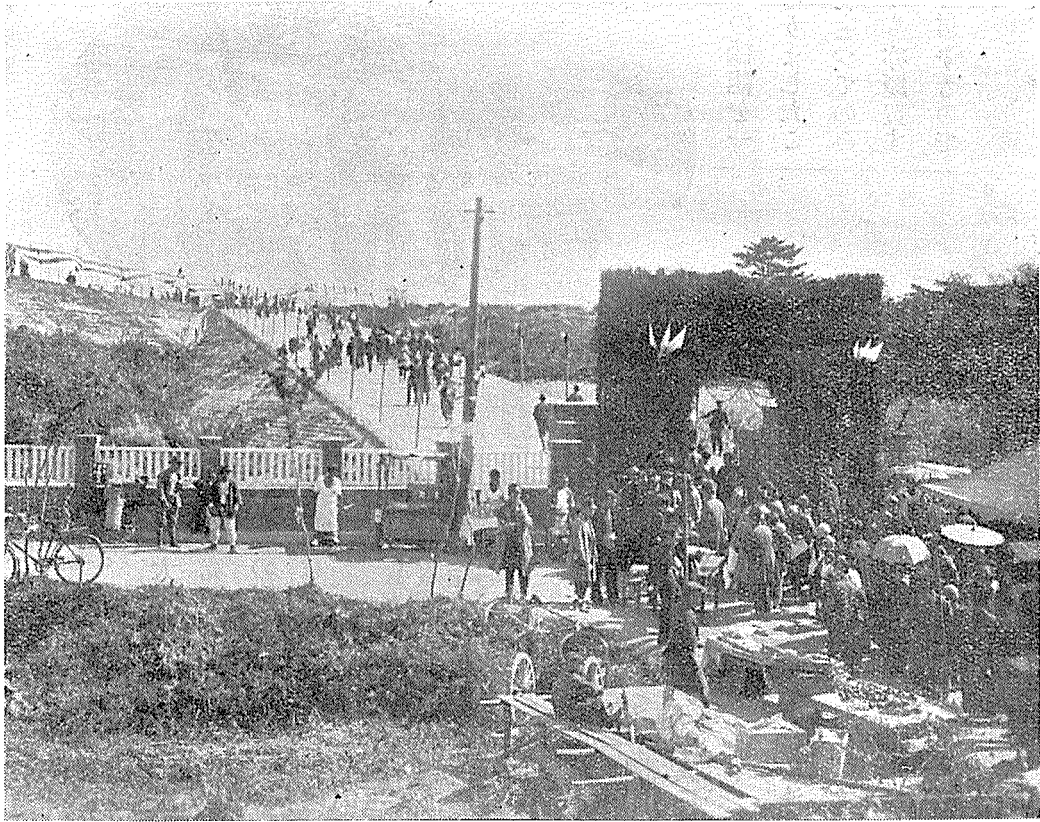
# 報學山里子

行發日五十月一十

號念記祭學大回一第

年五十正大

The First University Festival at Senriyama



(ひ賑の口入場動運大) 祭學大回一第

阪 大

堀 佐 土 話 電  
番〇七五五・九四〇一

局 報 學 學 大 西 關

座 口 金 貯 替 振  
番 五 七 八 二 一 阪 大

號 四 十 四 第

(關西大學大運動場開場式式辭摘録)

### 日本一の學生たれ

關西大學學長 松本 丞治

山岡順太郎氏、京阪土地株式會社、新  
京阪鐵道株式會社等の御寄附竝に山岡  
倭氏の不斷の御盡力に依り、ここに本  
學大運動の竣成を見、その開場式を舉  
行するに至つたことは、誠に同慶の極  
みでありまして、深く前記の各位に感  
謝の意を表する次第であります。

承るところに依りますと、この大運動  
場はその設備に於て、その廣袤に於て  
學校が有するものとしては正に日本一  
だといふことであります。この日本一  
の大運動の開場式の當日が、恰も所謂  
日本晴の好天氣であるといふことは、  
決して偶然ではないのでありまして、  
實に天意の存することを想はせるに充  
分であります。

わが大學の學生諸君は、今後充分にこ  
の大運動場を利用して、技を練り、體  
育に努め、日本一の強き學生となる  
同時に、この強く健全なる體驅もて一  
層研學に精進し、以て日本一の善良な  
る學生たられんことを切望するもので  
あります。

### 體育と智育

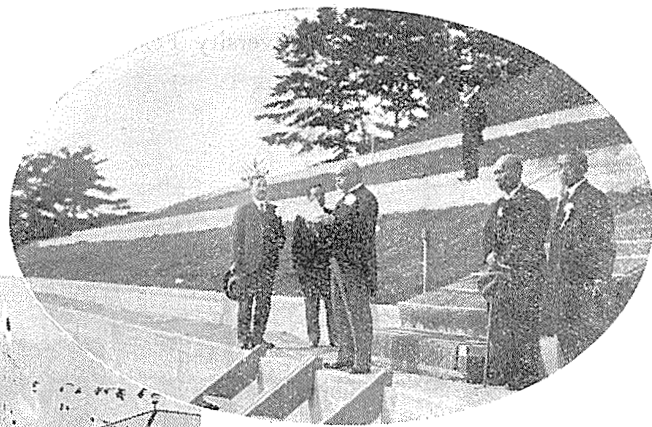
關西大學總理事 山岡順太郎

本日我關西大學大  
運動場開場式を行  
ふに當り、一言所  
感を陳ぶるの機を  
得ましたことは私  
の最も慶幸とする  
ところであります

本大學は昨日その  
創立四十周年記念  
式を舉行致しまし  
たが、殆ど半世紀  
に近き歴史を有し  
て居ります。殊に  
先年大學令に依る

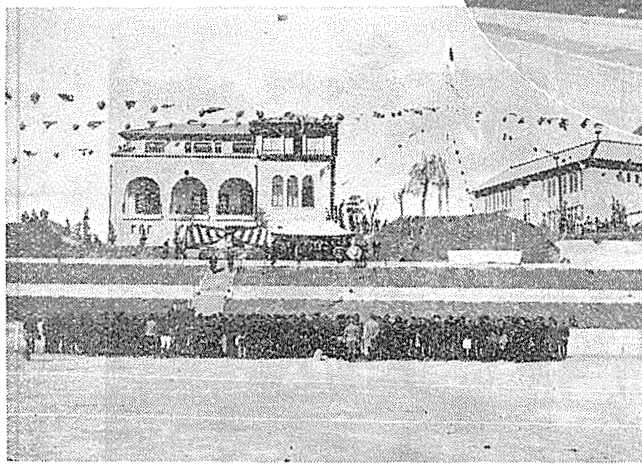
大學設立以來、大學としての機能を一  
層よく發揮し得るやうになりましたこ  
とは、單り私ども關係者にとつてのみ  
ならず、一般社會にとつても亦慶賀す  
べき一事たるを失はないと信するの  
であります。

申すまでもなく、大學は學問研究の場  
所であります。又體育に力を致すこ  
とも同様に重んじなければならぬので



あります。何となれば、古來體力に於  
て優れる國民が一般文物の上に於ても  
他の國民に秀でてゐることは、東西の  
歴史に見て明なるを以  
てであります。この意  
味に於て、本大學が將  
來益學問の研究を盛に  
して大學本來の目的を  
達するためには、一面

關西大學大運動場開場式  
(上—山岡總理事の式辭  
朗讀、下—開場式全景)



體育に資すべき設備の完全を期せざる  
を得ないのであります。これ、本大學  
が大運動場を新設し、以て全學を舉げ  
て體力を練るの活機を興へんとする所  
以であります。

かく大運動場が完成しました上は、更  
に學問研究に必須なる圖書館の整備が  
喫緊の問題となつて來るのであります  
が、これも今日既に設計を終へ、近く  
起工の運びに至つてゐるのでありま  
す。聽てこの圖書館が巍然として大運  
動場と相對して雄風を競ふの日が參り  
ましたならば、大學としての施設はこ  
こに略完成を見るのでありまして、私  
ども關係者は微力ながら、これら施設  
の完成に日夜思を致してゐる次第であ  
ります。本大學は曩に松本丞治博士を  
學長に迎へてその聲譽を高め、學内の  
教職員亦研鑽各努めて學績一層權威を  
加へつつあります。學生諸君がこの機  
運に相和して、心身の修養に努められ  
んこと、竝に大方各位が本大學の發展  
に直接間接の御援助あらんことを、私  
はこの機會に於て特に切望するもので  
あります。

目次

- 挿繪——第一回大學祭(大運動場入口の賑ひ)(表紙)——關西大學大運動場開場式——片山伸氏の近照——戸川巖氏の近照——第一回大學祭記念講演會——千里山學會圖書類展覽會——陸上大運動會開會式——テープ切り——スタンドを埋むる大觀衆——大學豫科學生の假裝行列——優勝せる京都帝大及び御影師範選手
- 日本一の學生たれ 關西大學學長 松本添治
- 體育と智育 關西大學總理事 山岡順太郎
- 社會現象としての文藝 片上 伸
- 學内報——本學本館の起工——クラブ・ハウスの竣成——新聞社員新設運動場來觀——教員囑任——第一回大學祭舉行——第二十六回「學の實化」講演會——第二十七回「學の實化」講演會——本學關係者勸辭
- 校友の面影——戸川巖氏
- 校友彙報
- 大學祭彙報
- 學生彙報
- 新刊紹介
- 千里山俳壇
- 千里山歌壇
- 附屬第二商業學校彙報
- 歐米の學界

(第二十六回學の實化講演摘録)

社會現象としての文藝

片上 伸

私はこれから社會現象としての文藝について御話致したいと思ふのですが、社會現象としての文藝について全體を一一例證をあげて御話することは時間が許しませんので、比較的必要なもののみについて、その大體を極めて常識的に御話したいと思ひます。



片上伸氏の近照

方には文藝は人間の實生活と離るべからざる關係を持つてゐるものであつて、須らく世道人心を裨益するものでなければならぬことを考へてゐる人もある。即ち文藝に對する要求に甚だしく功利的の分子が加はつたものであつて、一例を挙げれば或る作品によつて社會人の生活に或る道德的效果を要求する如きものであつて、前に述べた出世間的、脱俗的な立場からすれば甚だしく矛盾してゐるやうな感があるであらう。

で、先づ文藝は社會現象なりや否やについて證明すべきであるが、文藝が社會現象であり得ることは、殆んそ常識に屬するところであるから茲に一一説明はしない。若し此の點に疑問があれば、これから話す話の中に自然その點に觸れて行くことが多からうと思ふから、聞いて貰ひたい。兎に角茲では結論として文藝は社會現象である。尠くも社會現象の中に包含せしめて間違ひはないと言ふことを申上けたい。

一方は唯美主義的の傾向をもつたもので、即ち Arts for Art's sake の爲である。唯、美を、快樂を、興味を、陶醉を興へるものでさへあれば、それが功利的立場からは全然無價値のものでも良いとするものである。所謂、象牙の塔に立て籠つてゐるものであつて、如斯文藝も無いとは言へない。ところが著しく功利主義的の傾向を帯びて來る超世間的に、美のみを興味のみを或は快樂のみを求めてゐることは出来なくなる。即ち象牙の塔を出て社會と密接の關係を保つて來るのである。換

言すれば、社會の生活と文藝の持つ内容とが一致平行の形をこつて來るのである。随つて唯美主義的傾向を有する文藝と功利主義的傾向を有する文藝の二者の間には或る異つた點を有つものであると言ふことが考へられる。社會現象としての文藝を考へるに、先づこれ等の點を出發點として色色の點について考へて行く事が出来ると思ふ。

人間社會を離れて文藝は考へ得られない。人間によつて求められ、人間によつて作られ、人間によつて觀賞される文藝に、何故に超世間的なもの、俗世間的なものとの二つの道が別れてゐるかと言ふことは次に考へらるべき事であると思ふ。

實際について考へて見ると、人間生活の實相を源として出來た文學藝術は、音樂にして、小説にして、彫刻にして、人間生活そのもの或は人間生活の實相そのままのものは何處かに於いて違つてゐるのである。

音樂を聞き、小説を読み、芝居を見るのも、吾吾人間生活の種種相そのままを、音樂のメロデーの中に聞き、小説の中に読み、芝居に見るのみではない。現實では窺求し得られない或る美、興味、快樂をも、藝術の中に味得し得るのである。例へば芝居を見るにしても人間は芝居を見ることによつて現實では味得ない快感を求むる爲に行くのである。なるほゞ芝居に演ぜられるものは人生の耽美的な場面のみではない。醜惡な場面も、悲しい場面もある。然しそれを見る、見たいと希ふ人間の意識の中には、快樂と言つては言葉が少し妥當でないが、少くもあるたのしみ求めてゐると言ひ得るだらう。そこでこれ等のことと判るやうに、人間生活の實際と藝

術的作品に吾人が感得し得る姿は或る差違をその間に持つてゐることは明かである。

何故に違ひがあるかと言ふことは別の問題に屬するが少くもその間に或る差異のあることは事實である。文學にしろその他の藝術にしろ、その讀者、觀賞者に對して、それ等が出發點としたものの實相は異つた印象を、感銘を與へてゐることが考へられる。それ等の點からも文藝の社會現象に交渉を有することを考察する出發點とすることが出来る。そこでこれ等の點について實際の例を引きながら御話して行かうと思ふ。

先づ文學について、それが有つ社會との交渉について考へて見る。今日に於いては文學と呼ばれてゐるものの中に文字をつかつて書かれてゐないものは恐らくあるまい。文字と文學とは切り離すことの出来ぬほど密接なものである。けれども、それは今日の現象であつて、文字のない昔、と言つてもさう古く溯らなくてもよいが、文字はあつてもその使用が今日ほど自由で、便利でなかつた昔に於いてはさうではなかつた。即ち日本では弘法大師によつて考へられたと言はれる「かな」の考へ出される頃以前に於いては、文學と文字との關係は今日ほど密接ではなかつた。と言つて昔の人はそれでは全思想、感情、情緒を表現しなかつたかと言へばさうではない。「あづまはや」と言つたか、或は「あはれあはれ」と言つたかは判らぬが、兎に角、文字はなくてもその情緒、感想等は盛んに發表されたに違ひない。萬葉集などに大君の御使になつて戰場に行く時に感じた悲しみなどを唱つたものがある。今考へて見ても文字はなくつてもさうした感情は發表されてゐるに違ひな

いと言ふことが考へ得るのである。文字の無かつた時代と、文字が盛んに使用されるやうになつた時代のこゝが何故に申上ける必要があるかと言へば、文字の使はれなかつた時代の文學と、盛んに使はれるやうになつた時代の文學とは、その間に非常の變化が出来て來てゐるからである。

昔は文字によらずして口から耳へ傳はり、その人の口よりまた他の人の耳へと言ふ具合に傳播して行つて、多く語られ、多くの人の心を動かしたものが今日までのこつてゐるやうな譯で、傳説や詩や、民謡などがそれであつたのである。だから初めて詩なら「詩民謡なら、民謡を或る一人の人が作つた」としてそれが、甲から乙へ乙から丙へと言ふ風に轉訛してゆくに隨つて、甲の氣に入つた箇所でも、乙丙丁等の多數の人人の趣味思想に合致しない點はだんだん修作されて行つて、總ての人の氣に入つた點ばかりが遺ると言ふ様な有様であつた。隨つて今日では文學は各人が自由に文字を驅使してその個性の生々しい香をそのまま表現する事が出来、それが又近代の文學の一特色にもなつてゐるのであるが、昔は文學に個性と言ふものは少しもなかつた。つまり作者はその創作の時に於いては一人の作者に違ひないが、それが普及するに従つて一人の觀賞者、或は批評家の立場に立つやうな具合になり、全體の批評家、觀賞家たる人人もその作品の修作者であり同時にその作の上に於いては全く同一の思想、感情を味ひ得る所の人人であり得た、つまりその頃の作品は社會全體の人人の一種の合作であると言ひ得るのである。作者の名は不明であるが一時代一時期を代表する所の、詩、民謡和

歌等であり得るこゝの昔の作品は例をあげるとに難くないこゝろである。だからこれ等を民族の文學と言つてゐる。一時代、一時期に於ける社會を代表する、即ち民族の間から生れた文學と言ふ意味である。

現代では個性を非常に尊ぶのである。和歌に於いても、小説に於いても、殆ど作者の個性を没却しては、讀者の興味は半減されてしまふだらう。個性と言つても、私自身考へるこゝろによれば、より良き文學が作り出されるべき個性は、一社會、一民族等の多數の人の興味、快樂を全離れ得ざるこゝろのものであつて、或る一社會、一團體の希望を、快樂を、興味を、愉悅を表象し、或は暗示し或は導き出す性質のものでなければならぬ。これは思ふけれども、こゝに角、昔に於いては全全見るこゝの出来なかつた現象である。即ち民族的の文學は、一般的に興味のあつたこゝから出来上り現代の文學は個人の興味を起點として、それが一般社會人の批評はこゝもかく自由な修作を経るこゝもなくして直ちに生れ得るのである。この點から見ても文字の有無が文學に及ぼす影響は大きいものであることを知り得るのである。

それから更に進んで印刷と言ふことを考へて見る。昔は文字がたゞ使はれるやうになつたとしても、一一筆やペンで書いたもので、若し時と處を異にした他の人がそれを讀み或は知らんと言へば、それを一一筆寫しなればならなかつた。昔の著述に於いてはこゝの位の不便が忍ばれ、こゝの位の勢力が要求されたか、想像するに餘りあるこゝろである。今日は一度原作者が筆記し若くはタイプライターの如き近代的の機械を應用して書きあければ、

立ちこゝろに思ひのまま印刷することが出来るのである。假りに最初の原本の書きあけに拂はるる勢力が等しいとしたこゝろで、その普及と言ふことを考へるこゝの雲泥の差があるのである。昔は餘程重大なものでなければ書かなかつた。たゞ一國の君主の行狀とか、貴族僧侶と言つたやうに、その時代の權力の所有者のこゝろや、餘程重大なる事件しか書かなかつたものである。所が現代は口ばしの黄色い青年たちが、書いた感想、創作、雜文に到るまで、直ぐに印刷されて、やれ同人雜誌だ、やれパンフレットだこゝ世の中に飛び出して來るのである。發表、普及に伴ふ勞苦の程度が押し知られるのである。その結果、昔の文學と現今のそれは、その性質内容共に非常な影響を受けて變化してゐる。

昔は、文學と言つても純粹の意味の文學とは違つて、多くは宗教的なものか、非常に神秘的な力の持主とか、前に言つたやうに君主とか貴族等の如く偉大な力の持主のこゝろか、こゝに角非常に主要なこゝろでなければ書かなかつた。全般的に言つて非常に特權的分子が多く見出されるのである。所が印刷の發達した爲に、非常な變化が起きた。印刷の發達した動機は、文學をより容易に、より早く普及させたいと言ふ點にあつた、つまり表現慾の社會化であつたのだが、最近には、この印刷が商業的、經濟的な意味に利用されて、文學普及の爲めのみには使はれないやうになつた。つまり需要供給の關係で、需要のあるものは、みんな印刷して盛んに賣り出す、それが如何に文學的なものであつても、需要即ち讀む人が無ければ、流石、精巧な機械も使用されるこゝろはないやうな有様である。これは社會



現象としての文藝を有力に語るもので「新潮」

九月號で、佐藤春夫君が、菊地寛君その他の

の原稿料が高過ぎる、一面には認められない

作家も多いのに、須らく一定の稿料の協定を

するが良いと言つて盛んに奮慨してゐるが

それは結局無駄なことを言つてゐるに過ぎな

い。現代の社會組織を知らない者の言ふこと

で、作家も雖も、現代の社會組織から脱却し

ては生きてゆけないのである。もともとの需

要があり、商業的見地から原稿を買ふのであ

るからよく賣れるものに對しては、嫌だと言

つても原稿料を呉れるやうになる。それと反

對に、原稿料を得たいと思つても需要がなけ

れば駄目で、結局、現代の社會組織に於いて

は文學者も一箇の商品に過ぎないのである。だ

から奮慨するよりも、この事實を認めること

である。

これ等は、物的の條件から見た文藝の影響で

あるが、人的の影響について考へても同じで

ある。昔は作者であり同時に批評家であつた

い第三者が、或る作家の作品について批評を

するといふのが現今の通例である。

も一つ狭い問題について考へる。昔は讀者と

作者との間に庇護者と被庇護者との關係があ

つた。今日でも、作家に取つては大抵の讀者

は庇護者であることになり、住時は或る一

人若くは極く少數の人人が讀者として直接作

者をサポートしてゐた。十八世紀の前半頃ま

では印刷術にも何ら見るべき進歩がなく、そ

の頃の詩人や、小説家には王や貴族なきがサ

ポーターとして庇護の役をつとめてゐた。従

つて詩人なり作者なりは自然そのサポート

に對してこびるやうになつて来て、自由な何

等の制約を受けない心境からの作品を物する

ことは出来難いやうになつて来た。昔は王な

り貴族なり作者の庇護者たるべき人は、作者

に作品を要求する代償に、金の入つてゐる錦

の袋を直ちに手渡してゐた。現代は讀者がサ

ポーターであることに於ては變りはないが讀

者は直接作家に關係をもつてゐないで讀者の

昔も今も非常に變つて來てゐる。大體に於

いて小説を讀む人は令嬢だとか、奥さんだ

か言ふ人に多い。當面の生活に追はれるとな

くて比較的閑暇を多く持つてゐる爲であら

う。だから作品も中産階級以上の人人の生活

だとか事件だとかをこりあつたものが多

い。最近に到つて讀者の性質もだんだん變つ

て來たためにさうだと言ひ言へないが。つ

まり大體に於いて言へば近代の文學は貴族的

特權的の作品はだんだん少なくなつて來て、平

民的なものではなければならなくなつた。昔は

貴族僧侶なきの如く極く少數の人人の間に讀

まれたため、王者の盛んな威儀を示すものや

貴族なきの傲奢を唱つたものが多かつたが、

今は主に有産階級の主題としたものが多い。

例へば大阪毎日に連載中の今度の「愛經」な

ぎを見て、中に實業家の令嬢、女優、外交官

の未亡人、貴族の次男、なきが表はれてゐる

その何れを見て、その日その日を食ふに困

るやうな中産以下の人は少ない。つまりその

珍珠の御馳走になつたり、自動車で行き來し

たり、まあ結構な言ふより外にない生活振

りが展開されてゐる、それでこそ、新聞社の

希望通り讀者も減らないし、作者も相應に報

ひられる言ふ事が出来るのだが、若しあれ

がさうでなくつて、じめじめした生活の描寫

ばかり續いてゐたら大阪の讀者の八割方は無

くなつてしまふだらう。

英國でも十八世紀以前に物された *Orts* や

*Myths* などは貴族的なものが多く、ロシア

の古いものにもエクレリンと言ふ女王の性質

學徳を贊美したものなきがのこつてゐる。今

日はそんなものは誰も書かない。大ざつぱに

言つて貴族的なものから平民的、王權的なも

のから大衆的なものへ變つて來てゐる。これ

だけ申しても文學が社會現象である言ふこ

とが判るが、も少し違つた方向から言つて見

たいと思ふ。

文學の普及保存言ふことについて、今迄は

申しあげて來たのであるが、文學が讀者に如

何なる影響を與へるか言ふことを考へて見

たいと思ひます。これは文學の社會との交渉

を考へるに於て甚だ重要なことであつて、

つまり文學が世道人心に如何なる影響をもつ

ものであるか言ふことであつて、換言すれ

ば、文學の功利的觀察言ふ事になる。

或る人人は文學、殊に文學的作品を目して、

閑人の閑文字とす。る今も斯うした考へを

持つてゐる人があるかも知れない。然しまた

一面には一生懸命になつて生涯の仕事として

やつてゐる人もある。文學をやつたところで

先づパンの代りにはならない。音楽をやつて

も、聞いても直接に腹はふくれぬ。建築な

ぎも藝術の中に包含されてゐるが、一つの建

築物を構成してゐる木材なり石材なりは、焚物ださか、或はその他の用途で直接人間の生活に關係があるかも知れないが、建築が木材なり石材に分離せられた時には同時に藝術品ではなくて居る。つまり藝術そのものが直接餓を凌ぐ材料にはならないことになる。芝居に用ひる衣裳なども現實の役には立たない。極く稀な例として芝居の衣裳を着て町を歩くことなき考へられないでもないが、本質から言へばそんなことは稀なことではなればならない。そこで第一に考へられることは文藝は一つの飾りである、裝飾であると言ふことである。これは事實であつて繪畫、彫刻建築などみなさうである。

第二に考へられることは文藝は娛樂であると言ふことである。これは最も普遍的なものである。芝居を観たり、小説を読んだりするのもこの娛樂の爲である。芝居を観るにしても樂しい愉快なものばかりではない。中には非常に悲しい場面もあるたれども、観る人にとつてはその悲しみなり、苦惱の感じが、直接現實なものとはまるでかけ離れたもので、矢張り何等かの意味に於いて娛樂の分子を含むて居らないものはない。

第三には文化の低い時代では文藝を生存競争の手段にしたと言ふ説である。野蠻人が戦争のとき先づ勢揃へをして大抵の人は共に盾を執り立つて躍り且つ唱つて士氣を鼓舞した、斯うした時に唱はれる詩歌や、用ひられる武器器具等の彫刻等は、その人の存在を示し武威を張る爲に特異なものを選ばれたのであつた。即ち人體に刺青をして目立つやうにするさか、或はオーストラリアの蠻民の中には三百の兎の耳を獲つて飾るさかなさしてゐる。

それ等は藝術の極くプリミティブな現はれであつて敵を威嚇するに同時に味方に信賴の念を起さしめるものであつた。これ等は矢張り生存競争の手段となつてゐるを考へられる。狩獵などで見ても斯うした點は考へ得られる。昔の未開民族の間に於いて敵を闘つて捕虜をさつて歸つた時なき、それを馴化して味方の一員として利用することの必要から、歌を唱ひ舞を舞ひながら、そのリズムや、その姿態から受け得らるべき共感をもつてその捕虜の反抗心をやはらげ、進んではそれを味方に引き入れやうとした。つまり肉體的にも精神的にも敵を征服して我が樂籠の中のものとする爲に文藝が用ひられたと言ふので、これも生存競争の手段として用ひられたと言ひ得やう。

で、その時代には男女の間に於いて異性選擇の手段に用ひられるやうな場合があつた。戦勝の祭りの時或は平和の際なきでもその年中行事のときなき、男は躍り女は唱ひして、自然に好む對手を選択することが出来たのである。つまり自然に生存競争の手段に用ひられてゐた譯である。これを要約して言つて見れば文藝は社會の集團生活がそれなくしては成り立ち得ないところの一致、統一、團結等の爲に用ひられたのである。

更に今少し文化の進んだ時代のことを考へて見る。農業、漁業等の労働が行はれるやうになるに文學藝術と言ふやうなものは、それ等の労働の能率をあける爲に用ひられることになつた。麥つき歌、木遣り、舟歌等の如く、總て Primitive Poetry は、それを、反復合唱することによつて自然労働の能率をあけ且つ一致團結の力を與へる性質をもつてゐた。更に今一步進んだ社會では、一口に言へば、

權力階級の有する理想、趣味、必要等を多數の人人に感染せしめて、彼等に都合好き様に多數の人人を操縦する爲に文藝が用ひられた支配階級の理想へ多數の人人を惹きつける爲に用ひられた。少し實際の例について言へば先ず希臘でその時代に一番の特色を有する文藝作品を求めれば、第一に指を彫刻に屈すべきであらう。さうして彫刻の中でも最も共通的な特性をもつ代表的なものは、男性の殊に青年或は壯年時代の逞ましい肉體美の表現であつた。これはアデンを中心とする小都市がイタリアやペルシャを始めとして地中海に覇を争ふ列強を闘つて、自らを守る必要から尙武の氣象ミヌポーツの振作につめたためである。その頃の祭禮は彼の有名なオリンピック祭であつた。そしてそのオリンピック祭に於ては各種のゲームを大衆の前に演ずるのが最大の特色であつて、これ等は現代に於ける新らしい各種運動競技の濫觴をなしてゐるのである。即ち、支配階級の理想へ多數の民衆を惹きつける手段に用ひられてつたのである。

中世時代に於いてその特色を求めれば教會建築をあけることが出来やう。即ちその建築の特色はかのゴシック建築である。その頃は彼の十字軍を始めとして戰亂絶えず起り、民衆は安穩な生活を續けてゐることが出来なかつた。高い城壁を築いてその中に立籠つてゐる有様であつたが、内には君主の苛斂誅求に苦しむ外には外敵の侵略に備えなければならなかつた。従つて彼等には現世に於ける救ひは求むべく餘りに可能性に貧しく、自然に超現世的の救ひ、即ち神にすがつて天國の救ひを求むるやうになつてゐた。故に來世を信ずる

民衆は現世に於ける支配階級であつた僧侶の爲に充分乘すべき機運を把握されてしまつた僧侶は盛んに彼等民衆の心を惹いて壯大華麗な大教會を建築して、従つて僧侶の立場を擁護し、盛んに現世に於ける絶望を説き、來世に於ける極樂をもつて民衆の懐から、有るものも無いものも等しく貨財を收斂してその費用に當つたのである。宗教と言ふ美名を利用して僧侶は思ひきり彼等支配者の爲に計つたその結果廣大な寺領の出現となり、僧侶は民心を收斂し支配者たる王は僧侶を隠に庇護して、支配者も、準支配者も言ふべき僧侶もは持ちつ持たれつして互の利益を計つた。そして民衆を彼等の理想に惹きつける爲に暗い莊嚴なゴシック建築を盛んにやつて、教會の造營をした。現世の絶望さ來世の光明を希ふ民衆は不知不識の間に寺院に導き入れられるやうになつたのであつた。

又更に降つてルネッサンス以後に於いては、婦人の裸體畫をもつて一の特色を見るべきが出来やう。個人主義的思想の勃興に伴つて、民衆は盛んに自我と言ふ意識の中に眼醒め、彼等が求むる現世的、享樂的な要求はこの裸體畫の盛大を致すことになつた。前の壓迫され苛斂誅求に苦しめられた時代の反動もあるけれども、總じて個人主義的思想に眼醒めた民衆の持つ、現世征服の欲求から、従つて感覺的、利那的の享樂、陶酔を求めらるやうになつて來た。その如實に表現されたものが裸體畫であつた。

それから近世になつて商業が盛んになるに共に、社會に於ける支配と被支配との關係は著しく變つて來た。その最も顯著なる特徴は富裕階級の擡頭である。即ち王者も雖も富を有

する階級には一目置かねばならぬやうになつた。徳川時代の諸大名中で、大阪や堺の大商人に莫大の借金をしてゐたものも少なくなかつた。金の力では町人の方がかへつて勝つたかもしれないが、諸大名には傳統的權力がある爲に辛うじてその地位を保つてゐた。そこで權力と金力とが對峙するところになつた。王者はその權力をもつてその威を保つ爲めに極端に華麗な生活をして、その華麗莊嚴さをもつて民衆を威嚇する方法をこつた。その結果現はれたのが Opera である。音楽、衣裳、澤山の俳優、華麗な建築、流行の詩歌、舞踏等を織り込んで、非常な贅澤をつくしそれ等によつて民衆を威服し、王者の權力を見せやうとした、オペラは、故に最も貴族的な贅澤で今後この可能性の少い一つの藝術である勿論本當のオペラから大なり小なり轉化して残存はしてゆくであらうが、昔の王者がやつたやうなオペラは自然に衰滅してゆくものこそ私は考へる。これ等は一口に言へば、支配者が民衆の膽をうばふ、つまり、おごかす爲に作られたものである。例へば日本の能の如きもそれに類するものであつて、諸大名の後援の下に、立派な舞臺に華麗高價の衣裳、面、澤山の人たちをもつて音曲と詩文とを配した貴族的綜合藝術の一つであつて、今後はこれと同様のものは残存して行く可能性がだんだん減少しつつある。これ等も支配階級の理想に民衆を惹きつける爲に行はれたものを見るべきが出來得やう。

文藝の影響効果については今迄に述べた様に大體に四つに分けるべきが出来るが、極めて大雑把に述べたため充分に意を盡さぬ所もある。そしてこれ等四つは別別に分けて言はず

に全一的に言ふべきものもあり、その内の二つなり三つなりが綜合的に言はるべき場合もあるが一一茲には述べない。然し是等の四つのもに共通一貫した特色はないか？と言ふことを考へて見る必要があらう。即ち、要約して言ふならば、この四つのもに共通一貫せる特色と言ふのは、「文藝は何等かの程度に何時の時代に於いても、社會の集團生活、娛樂の手段に用ひらるること」である。娛樂は必然的に集團的の一致を要求する。一人芝居を見ても面白くないことあるまいが、社會の萬ての人がそれに無關心であればそれを見て楽しむ氣は確に減殺される。美しい着物を着ても見てくれる人がなければつまらないオリムピックの競技でも一人で走つてゐるの

はつまらない、多衆が見て問題にしてくれるのでやれる。即ち、程度の差こそあれ社會人の一致を必要とする。で、原則として言へば文藝は社會の集團、統一の爲に用ひられてゐる言へる。此の事實を認むる限りはそれが無用の長物だとか、閑人の閑文學だとかは言へなくなる。がしかし、事實はこの理論のやうにそんな單純には行つてゐない。集團と言つても文學藝術の對象とする社會的集團は事實に於いては極めて制限されてゐる。貴族的文藝の場合は殊にさうである。人類の爲と言ふが、實際には時と場所等によつて制限せられてゐる。故に文藝は時間を超越してゐる言ふは眞の科學的意味からは言へないことになる。だから文學藝術に階級性がないことは言へない。但し若し階級と言ふものがあればのことである。文學藝術に階級性がないなどと言ふのはさう言ふ人たちの認識不足の間違ひである。兎に角、原則としては、文藝は社會

の集團統一の爲に用ひられてゐる言ひ得るのであるが、然らば、哲學も、宗教も、その他の科學も社會の統一一致團結を目的とするのであるが、區別がつかぬことになる。故にこれ等のもの言ふ文藝の差別はさうでつけるかと言へば、ロシアのプーリキンが言つたことであるが、感情の社會化の手段として文藝が用ひられる言ふのである。トルストイの藝術論には文藝は情緒によりて人間結合の機縁をつくるものである言つてゐる。

文藝には社會人に共通するところの情緒を含むのである。一例をあげて言へば、吾等は或景色を見て「繪のやうだ」と言ひ、繪を見て「ほんものやうだ」と言ふ。然も、繪は自然そのもの言ふは全然異つた一面の紙又は布に畫かれたものに過ぎない。この繪を見ては自然その實物を想ひ、實物を見ては繪を思ふ言ふことには味ふべき意味があるのである。それは文學藝術は人間の情緒を一部分的に表現するものでなくして、能ふ限り全體的に表現するものであるからである。たゞは吾人が描かれた葡萄を見て、喰つて旨さうだと思つたり生きた生命を感じたりする。その感じは本當の物を見る時呼び起される感情と等しいものである。人間は葡萄が如何にして如斯生命力を發現し、如何にして美しい實を持ち、如何なる科學的性分によりそれ等の色が表現されてゐるか等言ふことを嚴密な意味では知つてゐないが、それ等によつて與へられる感情を綜合して、葡萄と言ふものの全體的な表現をするのである。自然の景色にしては、山、河、木、草、空氣、日光、風、動物等がコンビネートされて始めて自然の形を表現する、即ち全體的表現による美である。例

へばシベリアの野原でも、雲あり、草あり、光あり、それ等が渾然としてコンビネートされた時始めて西比利亞と思はれる繪の如き情緒を得ることが出来る。即ち最も願はしい結合にある時最も全體的の情緒をそのものに對して感ずるのである。此の點より文藝が人生の交通感能の爲に全體的の結合性をもつてゐるの感ずることが出来るのである。吾々がドフトエフスキーを讀んで、ラスコールニョフの様に悪人が割かれてあつても、その作全體として、全體的の人間そのものの表現されてゐることによつてその作から受ける感銘は悪のみではない。善のみではない。即ち換言すれば藝術そのもの持つ全體的の人間生活の種種に浸潤して行くのである。良い藝術品に接して受ける人間の感銘は、兎に角、部分的な人間の感情ではない、單一的なものではないそれは悲しい言へない、嬉しい言へない。陰鬱なばかりではない、ソーニヤなどが救はれて感ずる明る味もある。文藝が人心を結んでゆく、所謂情緒の社會化と言つてもそれは單純なものではない。學校では私自身も學生に説明する場合もあるが、眞にそれに觸れそれを知らんと思つれば、その作に接するより外には仕方がない。その原作について讀むことが一番その作の全般を知る近道である尺八を吹奏するにしても耳の側で聞くよりも遠くに離れてその微妙な韻律に耳も傾けなければ駄だ。そこで始めて美しい深刻な、一つの情緒が得られる、渾然としたものであつて部分的に、單に一語で、良い言ひか美しい言ひか言ひ得られない一つの感情、それは所謂感化であつて、人間の情緒を純化するもの、ピユリファイするものなのである。優にあはれ

なる情けを知る武士と言ふやうに、一つの Culture の所有者となることとなる。文藝の得失、利害を云ふのは、ここに言つたやうな點に對する認識不足の結果であらう。昔から西洋に於いても支那を中心とする東洋に於ても、文藝が人生に如何に重大な役目を果して行くものであるかと言ふことは數限りなく言はれてゐる。

この位で極く大雑把ではあつたが文藝と社會生活との關係については一通述べたことと思ふ。要約すれば、文藝と社會との密接な關係を述べて、それを物的の關係、人的關係に分ち、更に文藝そのものの及ぼす影響感化について大體述べたのである。

然し、その感化影響を考へる際に、時代により、文藝の内容が人間のカルチャーと無關係に見える時があると言ふことを忘れてはならない。それは藝術至上主義即ち所謂 Arts for Arts の時代だ。唯美主義の時代だ、社會が進歩を停めて、平和な安心な時には、文藝は社會の爲に否、その本来の人間社會の集團的手段に用ひらるる用がなくなつて、即ち御役御免になつた形になる。藝術はそれ自體の道を求めて超社會的になつて行き、自然感覺的、技巧的になつて、内容や感化力は留守になる。(時間のない爲に一例をあげて申上げられないから先を急ぎます。)

また、之に反して新しい社會の勃興して行く時には、文藝は盛に社會現象に對應してその役目を果す、例へば明治維新の時などは、先づ、新しい社會組織の成立と共に總て實際的諸科學が盛んになり、文藝も非常に功利的な性質が多くなつて來た。明治の極く初年には醫學をやつて醫者となるものが多く、徳川末

期の勢を受けた唯美主義の流れを脱却し切らない文士の多くは喰ふにすら困つた有様であつた。それから少し進んで、新社會の統一が要求されるやうになる、今迄の文藝は古物となつてその社會には全く不必要となる。そして次に來る新しき時代に適應するものが起きて來る。即ち明治二十年頃から起つた、現實主義的文藝がそれである、文學で言へば、坪内逍遙先生の「書生氣質」や「小説神髓」などによつて先驅された「寫實主義の文學」がそれである。即ちありのままに人生を見やうと言ふ風である。「書生氣質」や「小説神髓」は明治文學を研究するものには實に不朽の典籍として没却することの出來ぬものであるが、それは單に先驅けとなつた作品として尊いもので内容は幼稚なものである。最近、島崎藤村氏の「嵐」などは非常な傑作として萬ての人から認められてゐるやうであるが、「書生氣質」などに並べて見れば實に隔世の感がある。寫實主義も、ここまで行けば絶頂であらう。自分は「嵐」を読んで深く打たれた。技巧に見るも内容に見るも自然主義文學の絶頂をなす作であらうと思ふ。兎に角、未來の文藝ではないことを思はせられる。少くも寫實では完成期に近い作品であるとは言ひ得るを考へる。

社會人心が統一されて、平和安定の時には、唯美主義的のもの、人心不統一でこれから求めてゆかうとする時には大體功利的のものが出來ると言へる。

甚だ雜漢なものでおはぶかしく思ふが、文學と藝術が如何に社會現象と密接な關係を有するものであるかと言ふことは不満足ながら大體諒解されたことと思ふ。(完) M・S 生

體諒解されたことと思ふ。(完) M・S 生

### フラグメンツ

△ 經濟學に於ける豫言は假定的でなければならぬ。象棋の途中に於て、盤面を誰か専門家に示して見よ。若し彼がその後の盤の成行を豫言したとすれば、彼は誠に無謀である。若しさちらかの側が、彼が豫期したところから、實に僅少の相異しかない程でも異つたやうに駒を一つ動かす時には、その後の總ての手は變つて行く、而して尙ほその上二手乃至三手たした後は、總ての盤面は違つたものとなるであらう。

△ 競争は今では餘りに力強く成長せる一個の怪物である。若し吾々が完全に道德的であるならば、彼は自分の出る幕でないことを悟り、こそこそ逃げ失せるであらう。然し現在在るが如くんば、吾々が強いて力を以て彼に抵抗すれば、彼は激動して社會を無政府状態たらしめるであらう。然し若し吾々のために役立つやうに彼を導き得るならば、貧困の除去ですら爾く大仕事ではなくなるであらう。

△ 生産に關する、及びより低き程度に於て交易に關する結合は、それなくては獲られざる經濟の源泉である。勿論精力、自由及び彈力性に關して不利益な點もあり、その或ものはその結合せるものに、又或ものは一般公共に影響を及ぼす。然しそこには普通、自然的原因から起るころの、且つ倫理的態度の如何なる開發に依つても到達され得ないころの、實質的な利益(必ずしも純利益たり得ない)

の中心がある。他面、雇傭に關する結合は、倫理的態度の開發に依りて獲得され得ざる如何なる經濟をも齎さない。而もそれらは必然的に空費を全ひ。同時に、雇傭に關する結合に依りて、除去せんしつあるころの害悪は、その或ものは非常に重大なるが故に、倫理的改善の方途が可能ならざる限り、結合に依る改善の方途が多くの場合犠牲を支拂はされても尙ほ探るの値打があるかも知れぬ。否實際それだけの値打はあり或場合にはそれ以上の値打がある。

△ 政府の機能は出來るだけ少なく支配することではない。然し出來るだけ少なく爲すことではない。支配すれば政府が失敗すること、恰も戦へば軍隊が失敗すること同じ程度である。然し軍隊は成功するためには活潑でなければならぬ。而して政府は成功するためには止む時なく知識を練り且つ傳播し、刺戟し且つ協力しなければならぬ。

△ 未知は恐らく、この微小なる世界の歴史に於て、たつた一匹の小さい昆虫の演ずるその如く、殆んど取るに足らぬ役割をこの世界が演じてゐるころのものに關係があるであらうといふ結論に達した。……毎年私のこの未知に對する崇敬は益深くなつて來る、この世界に於ける總ての知識の範圍の狭いことに就て、私の意識は益堪えがたきものになつて來る、而して、かの顯微鏡的全體の中の顯微鏡的細物であるにしても、數えるに足るべき何ものかをその分量に加へたいこの私の希望は益強くなつて來る。

(Memorials of Alfred Marshall 46)



# 學 内 報

## 本學本館の起工

曩に住友合資會社より寄贈せられた建物は、既にこれを解築して千里山に移送し終り、本學本館に當つべく既に再建の工を起し、着着その工程を進めつつあるが、明早春竣工を見る筈である。同館は木造二層延約九百坪の建物にして、落成の曉には教授室、研究室、會議室、大學總本部、學部教室等に當てらるることになつてゐる。

## クラブ・ハウスの竣工

かねて新築の工を忙ぎつつあつた本學大運動場附屬學生集會場は、新運動の竣工と相前後して去月上旬竣工を見るに至つた。同集會場(前號表紙挿繪参照)は、地下室を含めて總坪數百五十坪、室數十一あり、歡迎室、露臺合宿室、各部部長室、マネージャー室、應接室、讀書室、浴場、脱衣場等の設けがそれぞれ完備されてゐる。

## 新聞社員の新設運動場來觀

去月十二日午前十一時から、市内の主要新聞社員諸氏を本學千里山學舎の新設クラブ・ハウスに招じ、新設大運動場を紹介し、批評を請ふた。

## 教員 囑 任

今回新に左の如く本學教員を囑任した。

専門部講師 經濟學士 加納修治郎  
地理、銀行簿記

## 大學祭舉行

第一回本學「大學祭」は前號豫報の通り、去月二十三、四兩日に互り極めて盛大裡に舉行された。詳細はこれを別項「大學祭彙報」欄に譲り、行事の概要を左に掲載する。

第一日 所謂日本晴の好天氣、早朝より教職員並に學生一同登學してそれぞれ部署につき、各行事の手配に餘念がない。十時頃から、各種の記念撮影、試球式、開技式等あり、一方午前九時開場の各展覽會場には、續續として觀覽者が詰め掛けて来る、時恰も大阪毎日新聞社和田飛行士が大毎第五號機を操縦して學上を旋廻飛翔しつつ祝意を表する等、「大學祭」気分はいやが上に濃厚さを増して行く。

午後一時から、多數の來賓と學員舉つての參列裡に創立四十周年記念式及び昇格記念式が舉行された。即ち定刻宮島專務理事會、君ヶ代の合奏裡に開式、松本學長の式辭、來賓の祝辭等があり、學歌合唱と共に式を閉ち、引續いて記念講演會に移る。講演會のプログラムは左の通りで、滿場の聴衆にそれぞれ多大の感銘を與へ、更に音楽部員の演奏に一層の興を添へて、宵暗が千里の丘を包む頃に至つて、漸く「大學祭」の第一日を了へた。

開會の辭 專務理事 宮島綱男  
琉球に於ける現行土地共有制度 講師 田邊信太郎

大學祭と報恩主義 教授 小泉幸治  
大學の本領 學長 松本照治

第二日 この日は記念陸上大運動會の開催される日である。前夜半千里山附近一帯に猛烈なる雷雨あり、今日の天候如何さ氣づかばはれたが、幸ひ名残りなく晴れて前日に劣らぬ秋晴となり天も本學の學運を壽ぐものやう、午前九時新設運動場開場式を神式にて開く。

先づ神官の行事滞りなく済み、松本學長の挨拶、山岡總理事の式辭、運動場建設の任に専ら執筆された山岡倭氏の工事報告等あり、全學を舉げて萬歳の聲に全丘を響かせつつ、閉式と同時に記念陸上大運動會の幕が切つて落された。

陸上大運動會の狀況は別項に詳報せる通りであるが、さしにも廣大なスタンドは觀衆を以て埋めらるるの盛況、一方前日に引き續いて開場せる展覽會場、音楽會場、模擬店等到るころ人波を濜はせて文字通り立錐の餘地もなく、一般來學者は數萬を以て數へられ、第一回の「大學祭」はかくて未曾有の盛大裡に終了した。

## 第二十六回「學の實化」講演會

去月五日午後一時から、來阪中の露西亞文學の大家、片上伸氏を千里山學舎に聘して、第二十六回「學の實化」講演會を開催した。定刻本學宮島專務理事の紹介に續いて、氏は「社會現象としての文藝」なる題下に、約二時間に互る興味深き講演をせられ、三時頃閉會した。因に右講演の概要を録して本誌本號第三頁以下に掲載して置いた。

## 第二十七回「學の實化」講演會

去月二十八日午後二時から、來朝中の獨逸フライブルヒ大學教授、文學博士エンゲルベルト・クレーフス氏(Engelbert Krebs)氏を千里山學舎に迎へて、第二十七回「學の實化」講演會を開催した。定刻に先だつこと約半時間、博士は本學宮島教授外數氏の案内にて來着、

新設クラブ・ハウスに於て小憩の後、會場に入られた。

先づ宮島教授は博士歡迎の辭を兼ねて來聽の教授、講師並に學生一同に同博士を紹介し、且つ閉會を宣す、次で本學武内教授が先づ當該講演の内容の大體を説明し、かくて愈博士は、「現代歐洲に於ける思想的轉回」(Die Gegenwertige Wendung im Geistesleben Europas)なる題下に約一時間に互る講演をなし、最後に宮島教授の謝辭があつて午後四時閉會した閉會後博士は再びクラブ・ハウスに入られ、本學教授諸氏と種種談話を交へ、薄暮相携へて千里山を辭去された。因に右講演の内容は、本學野村講師を煩して大要を譯出し、本誌次號に掲載する筈である。

## 本學軍事教官田中哲少佐 嚴父の逝去

本學配屬軍事教官陸軍歩兵少佐田中哲氏の嚴父、退役陸軍一等主計正、正五位勳一等田中太郎氏は去月二十二日千里山住宅の同少佐邸に於て逝去せられた。ここに謹んで弔意を表する次第である。因に同月二十八日午後一時から營まれた告別式には、木下幹事が本學を代表して參別し、學長の名に於て弔詞を捧げた。

## 本學關係者動靜

池尾芳藏氏 本學理事池尾芳藏氏は、今回日本電力株式會社副社長に就任せられた。  
下村耕次郎氏 本學評議員下村耕次郎氏は、今回日本電力株式會社專務取締役に當選就任せられた。

### 校友の面影

大阪堂島米穀 取引所庶務課長 戸川 巖氏

明治四十四年度法律學科出身

氏は明治十八年岡山縣上途郡雄神村に産れた關西中學を卒へて上阪し、明治四十一年本學に入り法律學科に籍を置いた。翌年一身上の都合に依り東京に移り住まふに及び明治大學に入り法律科二年を卒へ翌四十三年更に本學に轉じた。明治四十四年七月本學法律學科卒業と共に大阪堂島



川巖氏の近照

米穀取引所に入り精勵格勤、その學識その人格は夙に濟輩を抜き、今日庶務課長として同所に缺くべからざる重要な人物として上下、内外の信望淺からず聞く。故に岡山は政治熱の特に高き地方として知られてゐる如く、憲政の神と呼ばれてゐる犬養木堂を崇敬して郷黨の多くは、夢を走せて日比谷原頭、議政壇上の花たらんとしてゐた。氏も亦幼時よりこの感が深かりし言ふ。嘗つて市中津町に居を下してゐた頃、推されて町會議員たりしこゝあるはこのこゝを如實に語るものであらう。

入れて、

「秋」

雨 江

秋晴れや金木犀を植換へし  
花すすき果てしもなくて蟲の聲  
こ書いて下すつた。雨江氏は氏の俳名である

氏は又一面非常な讀書家として知られ、主に社會政策、法律、經濟等の書籍を蒐集、讀破し、殊に食糧問題、農村問題等は現職の必要もあり一層研究深く夙に一家の見を有してゐる

實に英雄閑日月在り矣である。俳境に自適しては一刻千金を争ふ人生の阿鼻叫喚も一幅の畫圖を觀じ、自然の清風に臥して松籟に、秋風に一味の禪域を求め、或は石に枕し流に漱ぎ、悠悠として仙に遊ぶこゝが出来、さは何かの物の本に見た言葉である。宜なるかな氏の風格には圓滿柔和の氣溢れて、對者を抱

擁せざれば熄まざるものがある。往年の悲風慘雨は跡方もなく、今日氏や始めて坦道に立つて眼を遙か彼方の平原に注げるの觀がある氏の家庭は母堂三令閨に當年十歳の令息に召使を加へて和氣溢るるものあり、今豊中新免に住んでゐらるる。

「私共の卒業した頃は私立學校出は官立に比してその待遇にも社會的の人氣にも格段の差があつた。その爲に彼等三吾し行く爲に、或はそれ等を凌ぐ爲には人一倍の努力が必然的に要求されるやうな具合であつた。尤も私は在學中から獨學的で、教室に於ける講義よりも寧ろ自ら書を讀んで自ら會得する主義であつたからその點困るほごでもなかつたが世に浮むまでは誰しも並大抵の苦勞ではない。然し世の中は正直なもので結局實力です。最近母校が愈盛大になつて心から慶賀してゐるが實力養成にも一層の努力を勵まれるやうに希望してやまない。私共もこれからだと思つて益努力するつもりです」氏は語つた。その眉宇に漲る一抹の決意こそ、吾人が氏の將來に期待し得る多くのものを語つてゐた。筆者は最後に氏の將來に榮あらむこゝを祈つて氏の許を辭した。

### 校友彙報

#### 福岡支部秋季例會

本學校校友會福岡支部では這般福岡地方裁判所上席判事として赴任した校友三島恒三郎氏の歓迎を兼ねて秋季例會を去る十月十七日午後五時から福岡市延命寺松尾花壇に開いた。定

刻池田重吉氏は開會の挨拶を兼ねて三島恒三郎氏歓迎の辭を述べ引續いて會務の報告をなした。やがて宴に移るに會員何れも書生時代の氣分に歸り互ひに胸襟を開いて且つ飲み且つ語り、懷舊談や隱藝に夜の更くるを忘れた午後十時母校の萬歳を三唱して盛會裡に散會した。因に當日の出席者は左の通りである。

- (池田重吉氏報)
- 池田重吉、濱崎多松、渡邊信男、小林功、木本龜太郎、三島恒三郎、森下政治、未松正行、以上諸氏(イロハ順)

#### 校友西村勝太郎氏より來信

かねてニューヨーク、コロンビア大學に在學中の校友西村勝太郎氏から最近學報局宛左の如き通信があつた。

「(前略)一週間程前再び歸郷仕り學校の準備も整へました、講義も本日より聞いて居ります。都合よければ來年の六月には卒業が出来るかと思つて居りますが、何分課目の Requirement が多く、殊に School of Business は最も負擔が重いので多くの邦人學生は寸時にして他の學部に轉籍する状態であります、小生幸ひにして Requirement Course も略半分充たしましたが未だに一般大學教育の科目が残つて居ます、會計學は過去一ケ年間、一般的の研究を致し一週二時間宛の講義と六時間の演習をやりました。演習は研究室で計算器を手にして非常な時間を費してやるのですが、試験も通りましたから今學期から少し進んで會計の研究をやり度いと思つてゐます。最後に會計検査を研究して當地での勉強を終る積りです(中略)。母校關西大學も諸教授の努力に依り益發展致し居るこゝ御送附

の學報にて拜見致し嬉しく存じてゐます(後略)。

### 校友動靜

河田茂秋氏(大一二專商) 姫路歩兵第三十九聯隊第十一中隊に一年志願兵として入營中  
前原 昇氏(大一二專經) 同  
原關太郎氏(大一二專經) 去る八月より日本信託銀行に奉職した。

進藤紫朗氏(明四四商) 先般八千代海上火災保險會社常務取締役を辭任せる氏は今般東京商業會議所會頭藤田誠一氏の藤田合名會社理事、並に日本油槽船株式會社事務取締役に就任した。

松永三郎氏(大一二商) 先般從來營業中なりし木炭問屋を廢業した。

八田 薫氏(大一二經) 福井縣立三國實業女學校より今般同縣立三國高等女學校に轉任。

荒賀勝平氏(大六法) 今般京都市上京區東堀川通丸田町上ル六丁目二二七に法律事務所を移轉した。

佐藤芳太郎氏(大一二商) 從來大同生命ビルディング内にてサト一服製造發賣に従事しつつありしが今般西區木田町一丁目五二に營業所を移轉した。  
山口直三郎氏(明二二法) 今般從三位に叙せられた。

古田吉五郎氏(明三九法) 從來在職中の攝陽銀行が三十四銀行を合併せるを機として同行を辭して帝國商業銀行に就職。

### 校友住所移動

井上篤之(明四三商) 京都市芝區白金今里町七七  
井上和夫(大一二專商) 廣島縣豊田郡本郷町一丁目

秦 良三(大一二專) 廣島市河原町一九番地  
山本洋平(大一二專法) 岡山縣後月郡縣主村  
中塚芳郎(大一二專法) 大阪市東成區野江町三丁目二五二

進藤紫朗(明四四商) 東京府荏原郡新井町新井宿美奈見一四六  
野々村弘(明四四商) 朝鮮水浦府海岸通三丁目朝鮮棉花株式會社社宅  
坂口軍司(大一二法) 大阪府西成郡津守町八五六番地

森 貞次(大一二專法) 神戸市兵庫大井通二丁目一七松井氏方  
廣田良三郎(大一二專經) 兵庫縣川邊郡園田村上阪部七九

岡本瀨一(大一二專) 高知市帶屋町四二五番地  
大隅元信(大一二專) 京都府紀伊郡深草町字飯食八二八ノ八地

山田延藏(大一二專商) 大阪市北區堂島濱通二丁目大阪海上火災保險株式會社  
佐藤政隆(大四法) 大阪市港區東田中町八丁目四六

加藤福雄(大九商) 神戸市外西灘村五毛字中島  
米谷一耶(大一二專經) 大阪市港區東田中町八丁目四九一

赤堀政基(明四〇法) 東京市赤坂區榎町一八  
淺井 明(大一二專) 京都府下深草町西出二二  
岡田善男(大一二專法) 三島郡春日村字中穗積四番屋敷

清間壽太郎(大一二專法) 鳥取縣西伯郡米子町西大谷  
神田義憲(大四法) 廣島市外牛田村  
油谷英一(大一二專法) 朝鮮京城府黃金町三丁目二九一 加來定義氏方

今西貞夫(推) 松山市玉川町  
西島辰藏(明三八法) 愛媛縣宇摩郡野田村  
越智清太郎(大九法) 愛媛縣新居郡新居濱町西町  
加藤敬之(大一二專法) 松山市豊坂町一丁目蓮福寺  
丹 昌(大五法) 今治市大字樹の本通今治商業銀行

村上春藏(明二四法) 愛媛縣喜多郡辰濱町伊豫木村株式會社  
滿田清四郎(大九法) 松山市北區町一六  
森 隆秀(大一二專法) 愛媛縣松山工場課  
波邊菊之助(推) 大阪府天王寺區堂ヶ芝町九

堀元嘉平治(大三法) 大阪商船株式會社門司支店  
荒賀勝平(大六法) 京都市上京區東堀川通丸太町上ル六丁目二二七

谷 岡登(大一二法) 大阪市此花區茶園町八一  
岸田駒太郎(大一二專法) 豐能郡櫻井谷尋常小學校内  
佐藤芳太郎(大一二專) 西區本田町一丁目五二  
明神信明(大一二專法) 北區中之島宗是町三八日野谷字市法律事務所

赤木喜久三(大一二專法) 住吉區玉出町一八六ノ一  
福田莊平(大三法) 兵庫縣神崎郡長谷村長谷驛鐵道官舎  
三木則八(大一二專法) 和歌山市元寺町日東製氷營業所

長谷川天地(大六法) 天王寺區石ヶ辻町二四  
片山 昇(大一二法) 兵庫縣武庫郡西灘村岩屋二六番地  
古田吉五郎(明三九法) 東京市赤坂區青山南町五丁目八十一番地

村。友。改。姓。名。 (舊) (新)  
大。一。五。專。法。 松。濤。敬。之。 加。藤。敬。之。

校友逝去  
大正十五年十月四日 松井慶次郎氏  
大正十五年度專門部法律學科卒業  
大正十五年十月二十二日 大森芳三郎氏  
大正十年度專門部經濟學科卒業  
右訃音に接し謹んで弔意を表す

### 附屬第二商業學校校報

天長節拜賀式舉行 去月三十一日午前十時から、同校講堂に於て天長節拜賀式を舉行す。定刻木下主事その他職員並に生徒一同列席、國歌合奏裡に開式、木下主事の勅語奏讀及び式辭があり、天長節奉祝歌合唱と共に閉式した。

同窓會第二回懇親會 同校卒業生から成る關西大學第二商業學校同窓會では、去月三十一日午後六時から、市内港區千代崎橋詰イロハ本店に於て第二回懇親會を開催した。會員約三十名の外に、木下主事、山崎、岡田、神保各教諭も出席し、盛會を極め九時半閉會した。

第三回校内優勝雄辯大會 本月六日午後六時から同校雨天體操場に於て第二回校内優勝雄辯大會を開催した。定刻木下主事、森川文藝部長、中村辯論部長、山崎、岡田、神保各辯論部幹事、その他諸教諭並に生徒一同參會、中村部長の開會の辭に次で、各級選出三十餘名の若き辯士が交戦熱辯を振ひ、最後に中村部長の審査講評があり、左記の諸君にそれぞれ優勝旗、賞品等を授與して九時半盛會裡に閉會した。

一等(優勝旗) 三年B組永海小一郎。  
二等(賞品) 一年B組坂本和義。三等(賞品) 一年C組藤原重太郎。

選外(賞品) 美濃昂三(三三A)、中島壽太郎(二二A)、石塚秀夫(一一B)、國定弘(一一C)、中本利衛(一一C)。

二商見學會生る 同校在校生有志に依り二商見學會なるものが新に組織せられ、その第一回見學は既に去月七日午前八時神保教諭引率の下に朝日會館に於ける新聞展覽會、大阪放送局等を見學した。

# 大學祭彙報

## 展覽會

「大學祭」の催しの中で各學會並に學友會各部の、それぞれ粹を凝らした展覽會は最も人目を惹いたものであつた。その種類は

- イ、千里山學會の圖書、額陳列
  - ロ、千里山學會の地理研究會の出品陳列
  - ハ、學友會運動部の優勝章出品陳列
  - ニ、皇陵崇敬會の出品陳列
  - ホ、學友會山岳部の出品陳列
  - ヘ、學友會馬術部及射撃部の出品陳列
  - ト、學友會端艇部の出品陳列
  - チ、學生蒐集趣味會の出品陳列
  - リ、學生短歌會の出品陳列
  - ヌ、學生廣告研究會の「ポスター」陳列
  - ル、佛蘭西研究會の出品陳列
  - オ、學生映畫研究會の出品陳列
  - ワ、國際聯盟協會本學學生支部の出品陳列
- 等であつて、階上階下の各教室に、それぞれ特種の趣向をこらしてゐた。この他に「大學祭ニュース」班の一室があり、千里山、福島雜誌部から成る新聞班が、時時刻刻のニュース發行に忙しく立働いてゐた。
- 二十三日は二十四日に比して來觀者が比較的小なかつたが、大阪外國語學校長、中目覺氏、日本共濟會會長、手塚太郎氏、安治川土地會社社長、本間第三氏、大阪毎日主幹、高石眞五郎氏等知名の士も熱心に參觀してゐた。
- 二十四日は學校關係者は勿論朝來來觀者引きも切らず、踵を接して、ぎの陳列場も身動き

の出來ぬ程賑ひを呈した。岸本汽船會社社長、木村阪和鐵道會社社長、保井近江銀行頭取、高柳博士、本山大阪毎日社長なごの名士を來

第一回大學祭記念講演會



觀者の中に見出した。左に各部陳列會場の模様を略記しやう。

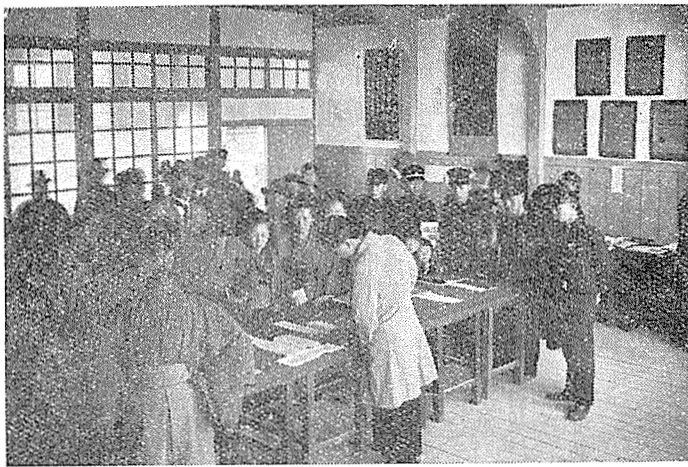
千里山學會の圖書、額陳列 千里山學會の出品になる圖書、額等が所狭く陳列されてゐる。現在入手するここの出來ぬ古版の書籍、學界に於ける珍本、稀有の寫眞等は、學者好事家等に取つて垂涎を禁じ得ざるもので、熱心な來觀者は一筆記してゐた。それ等の中で横卷大佐出品の「物茂卿の鈴録―自五卷至九卷―」革命當時の露國兵書三冊、大立目講師の

「シーボルトの日本紀行」その他の獨逸古書籍類、藤澤講師の「唐版唐時紀事」その他六朝時代の筆蹟等、宮島教授出品の「ポリチカル・エコノミイの名を完せる最初の英文獻たる James Stewart の An Enquiry into the principle of Political Economy 1767.」

「William Godwin の An Enquiry Concerning the power of Mankind」

「アダム・スミスの 住んだ "Pannure House" の寫眞」

新町講師の「林子平の海國兵談、三國通覽」等を見



千里山學會圖書額陳列會

地理學研究會の出品陳列 この室は地理書、地圖、地形寫眞等で埋められてゐた。地形の變化

化なきを示す爲に新舊兩圖を並べてあるのは初學者にも一目して判斷出來、一入興味が深い。庚正二年丙六月版の古大阪地圖などはそれに現はれてゐる大阪三現時の大阪三餘りに甚しい變化に驚くばかりであつた。その當時は江の子島も、九條も一個の島で今日の築港方面は八重の潮路にあつたことが判る。參觀中の佛蘭西領事は熱心に有馬方面の地形圖を見てゐた。この室では殊に出品配列に工夫が凝らされて、各人各様の興味を持たしむるやうになつてゐたのが目についた。

運動部の優勝章陳列 本學學生選手が過去に於いて學校の名に於いて闘ひて得た、血と汗の結晶たる榮譽の優勝を記念する、優勝盃や、優勝旗等が、血湧き肉躍る當時の戦況を語り顔に竝んでゐた。相撲部竹田選手の渡米記念寫眞や海外で獲得して來た大カップ等は特に人目を惹いてゐた。また大濱での全國相撲大會に獲得した、福井、竹田兩選手の個人優勝を記念する吉田司家授與の練絹三個も會場の中央に美はしく飾られてあつた。ここでは特に青年男女、學生等が熱心に觀覽してゐた。

皇陵崇敬會出品陳列 豫てから皇陵崇敬會に關しては本誌にその記事が掲載されてゐるが、各皇陵の寫眞、參拜記念寫眞、原豐太氏の皇陵參拜記その他の皇陵巡拜に關する新聞記事切抜、皇陵記事の見出される書籍等が極めて嚴そかに陳列してあつた。皇陵參拜記念の印譜なきは面白いものでその道の人には興味深いものであらう。皇陵の寫眞の大部分が參拜者の敬虔な禮拜の姿と共に撮影されてあつて此の室に入る人人をして自ら襟を正さしむるものがあつた。殊に最近長慶天皇に關する各新聞記事を一切抜いて展覽に供してあつた



ものなきは思ひつきであると思はれた。

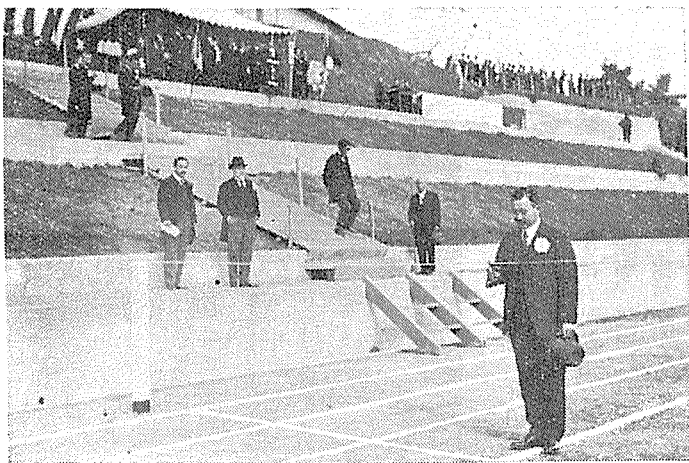
學友會山岳部の出品陳列 山岳部の工夫出品になつた一室で、山岳登攀に用する器具、スキー用具、等が陳列され、中央に同部の考案になるキヤンプをしつらへてゐる。右キヤンプは去る夏香櫛園でキヤンピング・ライフを營んだとき使用した由緒つきのもの由説明書がついてゐた。比較的此の部屋は荒涼の氣分が漲つてゐたけれども、山岳家のみの知るマウンテニアリングの魅力磅礴として觀者に迫るものがあつた。

學友會馬術部及射撃部の出品陳列 この室に入るに、先づ竝立してある又銃の劍尖に膽を冷し古銃の奇怪なるに好奇心をそそられる。見るもの武器に非るはなく、陳列品の尙武剛健の氣をそそるものはない。古へを想起して武者慄びを禁じ得ざる大前立打つたる堅甲、幾多人血をもて恤りたる射撃成績、創立日なる圖解により示されたる射撃成績、創立日尙淺きにも不拘斯界に勇名噴噴たる馬術部の功名を語る、トロフィー、賞状等の數數、軍書、戦時に於ける各種ポスター等、いかめしく、むくつけく、平和の裏に斯の如き武装を要求してゐる現實の社會相と、現代人が馬術射撃等をスポーツとして愛好する心境とを如實に示してゐた。

學友會艦艇部の出品陳列 艦艇部の趣向になる一室であつて、一艘のボートは前面に屹立する巉岩に向つて、方に艇庫を出でんとしてゐる模型が巧に造られてあつた。材料難の點もあらうが、徒らに志氣を鼓舞するポスター等で説明澤山の氣持もあつたが、山をも乗超へる部員の意氣込がよく現はれて、觀者にユーモラスな感銘を與へたのは意外の收穫であらう。

學生蒐集趣味會の出品陳列 蒐集神社の大鳥居をくぐる。マッチペーパーの種種、菓子箱用

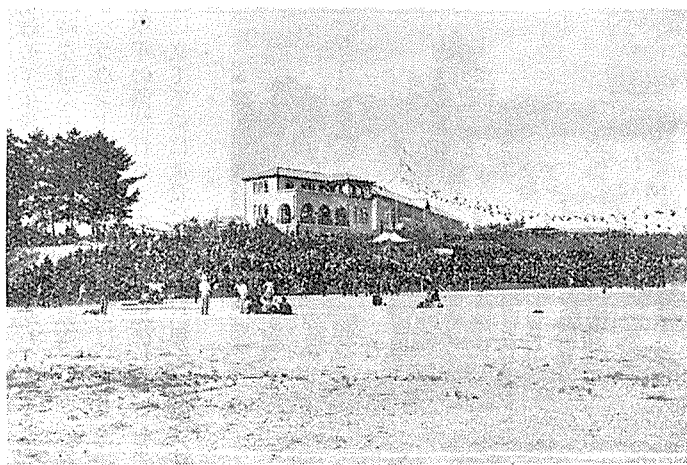
陸上大運動會開會式テーフ切り



のレットルの種種 楊子容器、神社佛閣の印譜、古錢等の數數、その他種種の出品が所狭く觀者の瞳を奪ふ、外國古郵便切手に垂涎してゐる人人があるかと思へば、大阪に於ける知名の青樓名の刻みこまれた大小幾多の楊子容れを見て興じてゐる一團があり、キネマスターのマッチペーパーが飾られた壁に晒然と立てる青年の側に、松竹ニユースの萬艦飾に見されてゐる少女あり。蒐集の何たるかを解するに解せざるを問はず、此室に入るも

のは等しく驚異と好奇の瞳を輝かしてゐた。學生短歌會の出品陳列 千里山短歌會の會員がその短冊、歌書、軸なを陳列してゐる。此の部屋の特異なる點は何人の胸にも和やかな靜謐を織り込むやうな室の雰圍氣であつた。中央に揮毫の卓を設けて來賓その他に歌俳の揮毫を依頼してゐた。

學生廣告研究會のポスター陳列 この一室は四方の壁、窓は勿論天井に至るまでポスターで埋められ、不時の百花妍を競ふ如く、美なるも



スタンドを埋むる大観衆 (陸上大運動會場)

の、力強き感あるもの 繊細なるもの、アツトラクティヴなるもの等それぞれを競つてゐた。

佛蘭西研究會の出品陳列 佛蘭西文化に關する書籍、寫眞、ポスター等が陳列され、目を惹く版畫なをも觀者に欣ばれてゐた。室の一隅で「液體空氣の實驗」を學生がしてゐる盛んに來觀者を集めてゐた。この部屋には流石に清雅な氣がみなぎつてゐた。

學生映畫研究會の出品 映畫に關する美麗なビラ、映各書常設館のニユース類、映畫雜誌、書籍、等、青年男女の眼を眩ぼしむる陳列がしてある。各展覽會場から此室まで廻つて來た來觀者は少なからず疲勞を覺へてゐるが、一度此の部屋に入れば軽い安慰を覺へて、疲勞を軽減されるやうに覺へしむるやうな氣分が漲つてゐた。それだけ參觀する人も多く立錫の餘地もない位であつた。

陳列國際聯盟協會本學學生支部の出品陳列 最後に國際聯盟支部の出品陳列室がある。平和に満ちた各種ポスター、國際聯盟に關する内外出版物、國際聯盟會議議場の模型等が陳列されてゐた。議場の模型はキュービットをもつて議員の議席を示し觀者に甚だ深い感銘を與へた。

### 陸上大運動會

大學祭催し物中での呼び物たる大運動會を名實共に關西の一名物たらしめるべく各部準備委員が諸般の用意を整へ満を持して待つ中に記念すべき大學祭第一日の夜は靜かに更けて行つた。明ければ十月二十四日、此の日秋天一碧高く澄み渡つて新装成れる千里山の大グラウンドを渡る秋風も爽やかに、將に絶好の運動日和である。朝來打揚げられてゐる花火の爆聲は四方の山に反響しクラブ・ハウスの前に高く揚げられた日の御旗本學のペナン

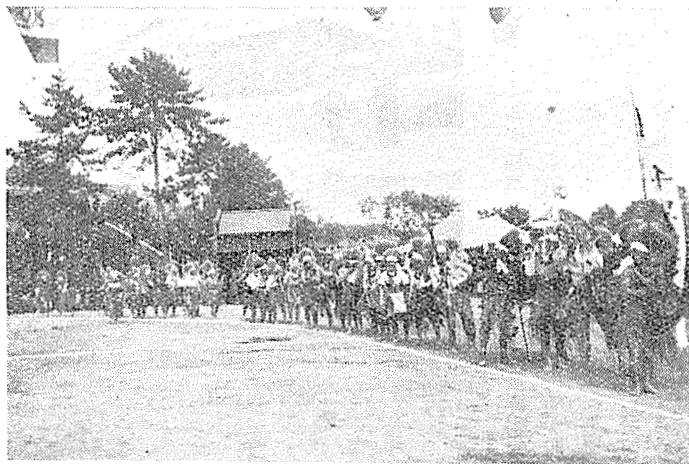
トは碧空に翻る。グラウンドの八方へ張り渡された萬國旗と紅提灯とは、外野のスタンドに引續いて張りめぐらされた紅白だんだらの幔幕と共に秋光に映えて運動會気分は會の始まるに先つて既に場の内外に漲つた。

嚴かな運動場開場式に次いで選手入場式は行はれ本學運動部の各選手は夫夫ユニフォームの色も晴やかに各部長に引卒せられて肅肅と入場するやスタンドの觀衆は一齊に拍手して之を迎へる。スタンドに向ひ合つた應援團席には豫科一、二、三の各學年、專門部、學部の應援團が何れも白、青、赤、紫、黄と色ざりざりに、或ひは小旗をかざし、或ひはメガホンを擧げて出陣の氣勢を擧げる。スタンドの觀衆も漸次其數を増し紅紫の色彩も交つて今や遅しと開會を待つ。時に午前九時三十分、斯くて第一回百米競走に依つて大運動會の序幕は切つて落された。

競技は略後出のプログラム通りの順序で行はれたが、一般の競技は各種目の得點を一等三點、二等二點、三等一點とし、全學生を豫科一、二、三の各學年及び專門部、學部の五組に分つて總得點を争ひ、最高點者には今回制定の優勝旗が授與せられ翌年の大會まで其の手に保管せられることになつてゐる。今や見よ此優勝旗は中等學校八百米リレー優勝者及び大學專門學校千六百米リレー優勝者に與へられる他の二旗の優勝旗と共に、宮島事務理事の筆に成る「親和」の金文字燦として大會本部の前に飾られてある。クラブ・ハウスの階上階下には總理事、學長を始め理事、教授並びに其家族の人人が席を占めて運動場を注視する。さればこそ出場選手の勇奮は更なり應援團も一競技毎に時に勝に誇つて躍り、敗を慰め

て歎ひ、又上氣を鼓舞せんとして手を拍つ、觀衆亦スタンドに満ちて大メガホンに依り刻々に報ぜらるるトラック及びフィールドの戰績

大學豫科學生の假裝行列



に動搖する。或ひは百米競争の烈、千五百米競争の壯、或ひは鐵彈投、槍投、圓盤投の雄走、山跳走高跳の技、或ひは百足競走、盲啞競走、パン喰競走の可笑味等、場内に跳躍する鐵の如き幾百の肉魂と、場を廻つて氷の如く凝つて動かざる幾萬の眼球と、息づまるやうな緊張を相呼び相傳へて、ここ千里山上には傳へ聞くギリシャの昔オリムピアの祭も斯くやと思はれるシーンが展開された。やがて此の緊張が雷の如き拍手に依つて破れた時、今

し終へた中等學校、八百米リレー及び大學專門學校千六百米リレーの第一豫選を以て午前プログラムの終る旨大メガホンが告げ知らせた。

一旦中食の爲めに散つた觀衆が再びスタンドを埋めて午後の競技は將に開かれんとする。一時を過ぐる二十分、一發の號砲と共に靜靜ミグラウンドに繰出して來たのは、即ち豫科各學年の假裝行列である。高足のピエロを先頭に立てて前に進むは豫科第三學年の陪審法



優勝せる京都帝大及び御影師範選手

庭をあらはすの假裝である。靴大のボール紙製手錠をはめられた罪人、檢事、判事、辯護士、陪審員としてはカリカリ屋、軍事教官力

士、大工、百姓、女給等思ひ思ひの假裝振りに満場を失笑せしめる。續いて豫科第二學年の書生風俗變遷の繪巻物式行列、而も手道具を竹刀の先に荷擔つて行く明治初年の書生の後に短袴弊衣握太の櫻杖を引きつづつて明治中葉の學生が續く、更に赤化防止團員や牛乳配達の現代書生が通り最後に紅巾綠衣の未來の大學生がしやなりしやなりと練つて行く、次に假裝行列の殿として躍り出したのは土人に扮した豫科第一學年生徒七十名、眞先に蕃旗を押し立て左手に髑髏を白く染めぬいた盾右手に槍を持つた半裸體の一隊が酋長の號令一下、蠻聲を擧げて踊躍する様勇猛も奇妙も形容の辭がない、斯く三隊の行列が蜿蜒として廣いトラックを一周すれば眞黒にグラウンドを取巻いた觀衆はヤンヤミ拍手喝采して暫しは鳴りも止まぬ。假裝行列が場外に姿を消すミプログラムに従つて或ひはトラックに或ひはフィールドに午前と同様な溼潤たる光景が再現せられた。特に人目を惹いたのは千里山、福島各學友會の對部競走である。ユニフォーム姿で走る野球部、フットボールを抱えて走る蹴球部、まわしに素裸の相撲部や、小旗をかざした辯論部等競走の中に一抹の滑稽味を漂はしたが結局千里山學友會では野球部が一等となりて學士會寄贈のペナントを受け、福島學友會では辯論部が一等となつた。次いで中等學校八百米リレーの決勝が出場校二十五校の中から第二豫選に入つた御影師範豊中中學、神港商業、北野中學の四校の間に行はれたが一等御影師範、二等神港商業、三等豊中中學の順で御影師範優勝し、大學專門學校千六百米リレーでは他校が棄權した爲め京都帝大が優勝者となり山岡總理事の手から夫

夫優勝旗を授與せられた。此時日は既に西山に傾むいてグラウンドには秋らしい斜陽がさす、來賓及び職員の間船競争は拍手と哄笑を以て迎へられ、最後の番組たる對組八百リレーでは學部が優勝した。尙一般競技の總得點數は學部六一點、豫科第三學年五四點、專門部五三點、豫科第二學年三三點、豫科第一學年二〇點で名譽の優勝旗は遂に學部の手に歸した。斯くて大メガホンが本大會の閉會を告げ渡るや各部學生は整然として本部前に集合し、「關西大學萬歳」を三唱した。既に四邊は暮色蒼然、瞬き初めた夕星が一日奔走に疲れた委員や選手を慰め顔である。

因に當日の競技順序は次の如くであつた。

- 1 百 米 競 走
- 2 鐵 彈 投
- 3 ス ペ リ ン グ 競 走
- 4 千 五 百 米 競 走
- 5 二 人 三 脚 競 走
- 6 百 米 競 走
- 7 盲 啞 競 走
- 8 四 百 米 競 走
- 9 走 幅 跳
- 10 圓 盤 投
- 11 四 百 米 競 走
- 12 走 高 跳
- 13 パ ン 喰 競 走
- 14 千 五 百 米 競 走
- 15 百 米 競 走
- 16 中 等 學 校 八 百 米 リ ー レ 豫 選 專 門 學 校 千 六 百 米 リ ー レ 豫 選
- 17 假 裝 行 列
- 18 百 米 競 走
- 19 鐵 彈 投
- 20 パ ン 喰 競 走

- 21 千 五 百 米 競 走
- 22 圓 盤 投
- 23 走 幅 跳
- 24 二 人 三 脚 競 走
- 25 走 高 跳
- 26 ス ペ リ ン グ 競 走
- 27 百 米 競 走
- 28 パ ン 喰 競 走
- 29 盲 啞 競 走
- 30 學 友 會 各 部 對 抗 競 走
- 31 百 米 競 走
- 32 中 等 學 校 八 百 米 リ ー レ 決 勝 專 門 學 校 千 六 百 米 リ ー レ 決 勝
- 33 來 賓 競 走
- 34 職 員 競 走
- 35 槍 投
- 36 對 組 八 百 米 リ ー レ 投

第一回大學祭記念音樂會

意匠の妙をこらし、珍品の粹を集めた各種展覽會場觀覽者の眼を奪ひ、肉弾相搏つ運動大會の各競技毎、スタンドに滿ちた觀衆のよめきが四邊を蓋ふてゐる時、一方講堂では記念音樂會が催され、若人の演奏がかもし出す藝術的陶醉氣分の裡に、幾百の聽衆をして終始去る能はざらしむるものがあつた。

因に演奏曲目は左の通りであつた。

第一部

- (一) マンドリンオーケストラ 關西大學學歌 プレクトラム ソサイエティ
- (二) 論 曲 (イ) 鶴 龜 (ロ) 弱 法師 (連吟) (ハ) 山 姥 (獨吟) (ニ) 熊 野 (仕舞) (ホ) 羽 衣 (仕舞) (ヘ) 高 砂 (仕舞)

第二部

- (一) マンドリンオーケストラ 村 の 祭 プレクトラム ソサイエティ
- (二) ハーモニカ獨奏 林中の鍛冶屋 豫、一 松田卯三郎
- (三) マンドリン四重奏 未 定 プレクトラム ソサイエティ
- (四) バリトン獨唱 未 定

- (三) マンドリンオーケストラ (イ) イボレ (ロ) ロチタコン プレクトラム ソサイエティ
- (四) ハーモニカ二重奏 プーランゲル將軍 豫、一 松田卯三郎 藤本 廠
- (五) ジョセランの小守唄其他 獨 唱 專門部 北村一耶
- (六) マンドリンオーケストラ 水車場のほほり プレクトラム ソサイエティ
- (七) ハーモニカ獨奏 ジブシーダンス 豫、一 藤本 廠
- (八) コルネット二重奏 (イ) トロメライ (ロ) バルカロール (ホ) フマン 豫、一 梅垣貞一 瀬戸不二夫
- (九) 三 重 唱 星 專門部 松尾織郎 北村一耶 柳廣 善
- (十) マンドリン四重奏 未 定 プレクトラム ソサイエティ
- (十一) ハーモニカ獨奏 (イ) ソレラ (ロ) 聯隊の娘 專門部 田中高志
- (十二) マンドリンオーケストラ バクタッドの會長 プレクトラム ソサイエティ

第一回「大學祭」役員一覽

- (五) 未 定 經、三 中野勇次郎
- (六) マンドリンオーケストラ 未 定 經、三 阪東政一
- (七) ハーモニカ二重奏 ビエロの物語 プレクトラム ソサイエティ
- (八) 臺 所 音 樂 キスメツト 專門部 高 藤本 野中 本田
- (九) マンドリンオーケストラ 眞夜の臺所 豫 科 アマチユア クラブ
- (十) 八 合 奏 舞 曲 數 番 プレクトラム ソサイエティ 白 土 鈴 田 木 井
- 執行委員長 專務理事 宮島綱男氏
- 展覽會係主任 教 授 沖中恒幸氏
- 同 同 講 師 武内省三氏
- 同 同 講 師 田邊信太郎氏
- 同 同 講 師 河盛好藏氏
- 音樂會係主任 教 授 村上喜貞氏
- 講演會係主任 同 同 講 師 佐々 穆氏
- 印刷係主任 同 同 講 師 井口俊一氏
- 揭示係主任 幹 事 木下孫一氏
- 競技係主任 學 生 監 松崎義盛氏
- 審判係主任 教 授 櫻井 匡氏
- 助 教 授 松田 一氏

賞品係主任 講 師 野村次夫氏  
 召集係主任 同 賀來俊一氏  
 記録係主任 教 授 岩崎卯一氏  
 揭示係主任 同 水谷揆一氏  
 各校選手係主任 講 師 森下政一氏  
 接待係主任 教 授 小泉幸治氏  
 同 講 師 加藤金次郎氏  
 學生聯絡係主任 教 授 中村部次郎氏  
 同 講 師 山村 喬氏  
 會場取締係主任 軍事教官 横卷茂雄氏  
 同 同 田中 哲氏  
 同 同 板津直彦氏  
 設備係主任 講 師 河村信一氏  
 同 同 樋口 純氏  
 同 同 桂 忠雄氏  
 式場係主任 同 秘 書 木戸卯之助氏  
 プログラム係主任 教 授 岩崎卯一氏  
 衛生係主任 講 師 大立目重虎氏  
 大會記事係主任 同 同 今山 實氏  
 同 同 新町徳之氏  
 庶務會計係主任 同 秘 書 田川七郎氏  
 總務係(學生)——西田檜治君、上村靜馬君、中山寅造君、榎本信夫君、黒柳章君、服部實君、瀬戸健助君、青田文一君、船曳俊雄君、星野武二君、平田茂君  
 音楽會係(學生)——阪東政一君、栗並稔君、外音樂部員一同  
 展覧會係(學生)——山口常一君、宮田平三君、星野君、綾部研三君、入江賢壽君、廣瀬義雄君、西崎作太郎君、福原菊次郎君、伊集院賢君、祐成達一君  
 講演會係(學生)——榎本信夫君、島田三郎君、辯論部部員  
 揭示係(學生)——田基中次君、辰巳孝治君、加藤昌秀君、田中義雄君

接待係(學生)——中野勇次郎君、増子一己君、伊藤祐一君、北原元茂君、杉竹清次郎君、本田末一君、大島君、西田作雄君、武氏英二君、萩原一君  
 學生聯絡係(學生)——國松左太夫君、八澤俱好君、山口君、島田信一君、寺下勇君、奥田治君、青野昌平君、藤野春三君、伊藤徳次郎君、山口清君、前川君  
 會場取締係(學生)——高岡武夫君、戸張信夫君、田島文雄君、村上弘君、外武衛部部員  
 設備及式場係(學生)——中山寅造君、松本武君、宇部呂義雄君、長岡盛人君、村田定市君、西原新太郎君、金澤佳郎君、東清一君、沖中秀直君、西田檜治君、酒井勝君、萩原一君、森吉雄君、中島君、外相撲部部員、蹴球部部員、庭球部部員、馬術部部員、水泳部部員  
 プログラム・會記事係(學生)——黒柳章君、服部實君、福田美史君、外雜誌部部員  
 宣傳係(學生)——榎本信夫君、島田三郎君、外辯論部部員  
 衛生係(學生)——松谷哲藏君、中井三之助君、鹽屋君、川地鹿之助君、中辻君、恩地政治君、三木八郎君、妹尾平八郎君

**競技係**

審判長 教 授 櫻井 匡氏  
 審判主任(トラウト) 助教 松田 一氏  
 決勝審判員(學生)——木下恒雄君、石渡俊一君、岸源左衛門君、福田義美君、森田忠雄君、山田巖君、丸谷實君  
 投跳審判員(學生)——南浦宗夫君、村上正躬君、金政卯一君、林太郎君、田尻常藏君、村上平君、谷上茂君、花谷猛君、中澤四郎君、古川親君、上田保孝君、戸川靜馬君、山縣淳一君、吉川平治君、松隈獅郎君  
 出發合圖員(校友)——金田格氏  
 (第二頁(續))

### 學生彙報

#### 千里山雜誌部報

會合の機會に乏しい千里山學友會各部委員、雜誌部委員の意思の疏通を圖る目的を以て去る九月二十五日午後六時から天神橋筋五丁目赤玉食堂に於て雜誌部主催の各部委員招待會が催された。家刻雜誌部長新町講師、前部長村上教授始め各委員出席、黒柳雜誌部委員開會の挨拶を述べ、部長、前部長は交「千里山」に對する注意、激勵の辭を述べた。後、記念の撮影を終へて宴に入り各部委員、雜誌部委員は互ひに意見を交換し又は希望や抱負を語り合つて双方共大いに得るころがあつた。最後に學歌を高唱し和氣藪藪の裡に會を閉ぢたのは午後十時であつた。

#### 千里山蹴球部報

甲南高校を敗る——去月十三日午後四時から甲南高等學校校庭でラ式蹴球戰舉行、十二對三の成績にて本學大勝した。

法政大學對本學ラ式蹴球戰——大阪朝日新聞社後援の下に去月十七日午前十一時三十五分より第二回法政大學對本學ラ式蹴球戰を甲子園球場に於いて舉行した。杉本氏フェリ、脇野、植木兩氏線審、法政のキックオフによつて開始、前半に於いて、本學十五分後スクラムの球を取つてフラインドを衝き北地君法政のクォーター・ラインを破り左隅にトライす。(ゴールならず)法政しばしば機會を逸したが二十分後二十五碼ルースの球を法政小池

君單身ドリブルしてトライす(ゴールならず)兩軍得點各三點、後半戦に於いては本學意外に苦戦に陥り、法政十五分後スクラムの球を川原君十五ヤード右にトライし(ゴールならず)二十五分後ライン・アウトの球を川原君またトライしたがゴールならず、タイム・アップ前に本學戸張君二十五ヤードから單身疾走してゴール右六ヤード邊にトライして原田君のゴールミナつたが及ばず、タイムアップミナつた。九對八の接戦で本學惜敗した。因に兩軍の陣容は左の通りであつた。

本學 池藤岡中吉戸二小 北淺 藤稻瀧砂 原  
 田尾部島田張星田 地田 井本川野 田  
 F W H B T B F B  
 村徳印小長申川島 小奥 間川島石 酒  
 田富東池尾村原井 見田 山谷瀨塚 井

對外語ラ式蹴球戰——阪神大學專門學校ラゲビリーグ戰大阪の部第一回戰本學對大阪外語試合は十月二十七日午後三時半より大阪高商校庭にて、奥村氏フェリ、外語先蹴にて開始、前半兩軍得點なく後半十分本學増田君トライし更にタイム・アップ一分前本學ベナルティを得北地君ゴール、六對〇で本學大勝した。

對神戸高商ラ式蹴球戰——關西學生ラ式蹴球聯盟戰中本學對神戸高商ラ式蹴球戰は十月三十一日午後零時十五分より神戸一中校庭にて舉行、米澤氏フェリの下に本學先蹴す。兩軍技倆ほほ伯仲し前半戦に於て最初何れが先きにゴールするか豫想つかざりしが十五分後神戸高商R・W高田君からのパスを、小池林君シュートして一點を先取すれば本學選手力戦し形勢挽回に努めたれどもハーフ・タイ





# 歐米の學界

## 逝けるクナップ教授

ヨゼフ・シュンペーター

G. F. Knappは一九二六年二月二十日を以て獨逸學界よりその影を没した。彼は實に獨逸經濟學界の第三期を劃せし一明星とも稱せられる。即ち其の一は Seedorff の Justi の名によつて知られる Cameralistic な時期で、第二は、英國の古典派時期に相當する Thünen や Hermann の業績を以て頂點たりし時期、稍趣きを異にするが、社會經濟學の歴史的研究法がそれである。

彼の友人である Schmoller, Wagner, Bücher, Brentano に比して尙多くの相違點を有してゐるが、クナップは常に彼等と交はり長短相補交したのである。彼は一八四二年三月七日獨逸 Giessen にて、有名な工藝學書の著者で且大學教授たる人の息として生れた。後、彼は統計家たる準備として München, Berlin, Göttingen に學び、當時數學を履修した。一八六七年彼は Leipzig の市役所の統計局長となつた。爾來數年職に在つて、其効績頓に擧り、彼の下に成りしものは何れも優秀なる成績を示した。一八六九年 Leipzig 大學の員外教授 Aussenordentlicher Professor に任ぜられた。是より更に Strassburg 大學に招ぜられて、正教授 Ordentlicher Professor の職に就いた。此處で彼は、退職する迄即ち一九一八年同市が佛國領に變更せられる迄の長い間を過した。彼は、凡そ、其の爲す可き事は非凡なる精力

を以て、専心一意に従事する特性を有してゐた。故に、彼の生涯を通じての業績を回顧することは自ら、他の同様な知識活動をなす人人のそれに比して容易である。彼は一八七四年迄は、彼の Thünen に關する博士論文と租稅論の二つを除いては、大體統計家であつた。彼は又實際の仕事も別として統計學理の上にも種種貢獻した。其中のあるもの、即ち次記の著作は今尙讀むべき價値がある。故に假令、吾人が彼に一流又は之に亞ぐ學者たるの名譽を與ふるに躊躇するとしても、其理由は寧ろ統計學以外の方面に求めらるべきものである。

(1) Über die Einmütigung der Sterblichkeit aus den Aufzeichnungen der Bevölkerungss Statistik, 1868年

(2) Die neuen Ansichten über Moralstatistik 1871年

(3) Theorie des Bevölkerungswechsels: zur angewandten Mathematik, 1874年

經濟史家として『制度經濟』學者として、彼は實に偉大なものであつた。一八八七年に出版せし書 Bauerbefreiung und der Ursprung der Landarbeiter in den ältern teilen Preussens は實に、此點に於ける彼の典型的な傑作である。之れに依つて祖述者達は、根本的な影響を受け、又經濟學の一部門にも匹敵する程のものが創らるに至つた。此理由は歴史の取扱法が新しかつた爲めでもなければ、又取扱困難な材料を巧妙に扱つた爲めでもない。さう云ふ點では彼は Meitzen 又は Hansson の同様であつたが、其外に尙類なき高い稀な特質を有してゐた。彼は明哲な——筆者は寧ろ靈感的な云ひ度いが——直覺を有し之により表象の奥深くを洞察して事物の本體を極めた。彼が歴史の過程と問題を觀察

し把握した程度は、多くの人が自己を圍繞する事實を見且つ理解するよりも一層確かであつた。加之、彼は現代事實をよく理解して、其上に歴史的分析を基礎づけた。一八九一年の著書 Landarbeiter in Knechtschaft und Freiheit 及び一八九七年 Grundherrschaft und Rittersgut. の如きは、一部は歴史的事實であるが、他面獨逸地主及び其勞動者の現狀に對する研究の結果である。筆者が特に云ひ度いのはクナップが歴史家たるに相應しい性質を有してゐたことである、而も歴史物語を求めた史家にあらずして歴史の問題を求めた史家が有すべき凡ての條件を満すに足る性質を有せしことである。彼は一八九五年に其仕事を中止し、再度全然異なる問題を研究し始めた。彼は是によつて偉大なる成功を博した。其著 Staatliche Theorie des Geldes は一九〇五年 Royal Economic Society によつて最初の英譯が出版せられ其爲に國際的聲譽を克も得た事は無論である。彼の學說の祖述者たちはその書を競ふて讀んだ、賞讃する人も、反對説の人人も、殊に後者は前者が謙辭をもつてするに對して猛烈なる反對によつて、共にその書の異常なる成功に與つて貢獻する所があつた。此著に於いては概念の偉大

獨立的なる完成、體型の新鮮味等幾多推稱すべき點があるが、又其經濟理論の根本的問題であるものを取扱ふに當り誤れること、獨逸の貨幣論に及ぼせる影響が餘り大ならざりしことも、否定し得ない所である。しかし、此書が一の經濟學說として若干缺點を有すとしても尙之を輕しく非難するは危険である。のみならず夫は此傑出せる人物が自ら證明し得ざりし事を多くの人に確信せしめ、時には自らも確信を有せざりし事をさへ人人に信ぜしめた其偉大なる力を示すものである。(近着イコノミック・ジャーナル所載——R. N. 生譯)

## フリードリッヒ・リスト協會の創立

ドイツからの報導に依れば、學界の新人等はドイツに "Friedrich List Gesellschaft" ("Friedrich List 協會") なる學會を設立した。會員は主に學究的な經濟學者であつて評議員には學界の大家が多數參加し、ドイツ學士院及び著名な實業家は會の資金に夫夫金員を齎出してゐる。此協會は昔の著作を編纂したり、會が主となつて經濟學說史に關する諸研究を發刊したりして、以て經濟學史の研究を發達せしめんことを期してゐる。目下、フリードリッヒ・リストの諸著作に評釋を加へた新刊本を前後七冊に分つて出版すべく準備中である。而して此中には新聞に發表せられた論說、並びに演說書翰等々へも集録される筈であつて、其上に尙一層嚴密な研究や多くの新資料を基としてリストの學說に新生命を與へ、之を其書の補遺となす由である。又此新刊本に於いては本文の絶對的正確を期するは勿論、従來手に入らなかつた興味ある事物——就中最近バリーに於て發見せられた有名ナリストの懸賞論文も其一である——を載せ、或ひはリストが其生涯中各異なる時期に抱いてゐた意見や思想、或ひはリストが之等の意見や思想を抱くに至つた其原因並びに夫に關係ある人事的關係、環境的事實の諸影響をも細大漏さず分析研究して掲載するであらう。アメリカに於いてリストが如何なる生活を送つたか又其處で如何なるものを書いたかについては既に特別の研究がなされてゐる。實に此版の完全正確を保證せんが爲めに手數や費用は惜しげもなく支出せられてゐるのである。——近着イコノミック・ジャーナルより——

# 新刊紹介

## 南朝山河の秋

小笠原自也著

著者は本學校友(明治三十六年度法律科卒業)多年大阪毎日において文筆に親しみし人である。『南朝山河の秋』は、辭を大阪在の一農夫南朝遺跡巡禮の述懐に借り、想を遠く『太平記』『増鏡』『外史』の域に走せ、貫くに一死君國に報ひし忠臣其弱を申ふの赤心をもつてしてある。一國破れて山河在り、城春にして草木深し』の哀韻終始測測と迫りて、讀む入をして、自らなる天衣無縫の文飾に恍惚たらしめ、更に該博なる史實考證の結果になれる公平なる立論をもつてその間に點じ、一讀、史を讀いて自ら娛しみとすの心境に誘ふものがある。

その序に「さやうなら行つてまゐります。何處へとは問ふて下されませぬ、この春のはじめ少うし頭の病にかゝりまして以来、健康の恢復甚だ遅きからだの保養の爲と、かねて志して居りました山河の秋を見に參らうために、そこへへ」の旅衣知らない里の夕日にも、照されながら遠い濱邊の寒雨にも濡れながら、暫らくは着つても慣れないのが心願でござります。百性の本分を忘れて、稻の蒔り入れ、麥の種まき、いそがしい季節の仕事を含みまするまはひは、ごうぞご免下されませるやうに」と言つてゐるまはひ、開卷第一頁から最後まで、懐しい老爺の豊富な昔語りには魅せられた小兒のやうに、じむわりと、親朴な氣分に浸される。蓋し、この書の持つ一特色であらう。最初に「これは子供が讀んで喜ぶ本である」と思ひ讀み行く中に「大人が讀んでも實に面白い」と感じ、更に讀後「肩の凝らぬ文體を用ひて史跡にまつはるかにも廣汎な軍記物語りか、纏つる興味と、

ぐんぐん迫る愛國精神の感化をもつて讀まじめる作者、蓋し凡手ではない。腹があるのだ。その腹の方だ、斯う安んず自分の胸奥に喰ひ入るのには」と感じたのは、欺らぬ評者の實感であつた。

著者は先づ杖を登置に引き、櫓も柱も雨露に蝕まれた一木一石に逝きし日の行在の宮居を偲び、藤房卿隱栖の妙感寺を、落日赤き琵琶湖畔の村に訪れ、追懷に借りて往時の細の心事を説いて微細漏さず、或は金崎城を訪ふの途に六波羅の鎮將北條仲時以下四百三十二士の墓を蓮華寺にとぶらひ、荒茅の雲深き峠路に立つて、蕭蕭と煙る往年の古戰場の後に黙想にふけり、柚山城下に南朝を説き里人を驚倒せしめ、瓜生兄弟の義烈を讀み、淺水に出すべく驟路に立つて勾當内侍が義貞を追へる心事を辯じて、著者が所謂、外史が輩の稗史小説的妄断を排して、秋水一下して麻を断つのが概がある。最後に燈明寺暖に左中將戦死の前後を叙し、越前の稱念寺に親しくその畫像を拜し縷縷として英雄の禁懷を述べてゐる。その義貞の心事を叙するや甚だ眞率、枯葉を吹いて去る一陣の秋風に、悲歌慷慨、天に向つて語るの状がある。

讀後「これある讀書や」の感と、今更乍ら眞宗皇帝の「讀書自在千鐘粟」の辭を思はせられる。若溪會あたりから良著として推稱されるに違ひあるまい。蓋し記して學生諸君に一讀をすすむる所以である。——M・S生——(定價壹圓四拾錢 大阪朝北通二、盛文館發賣)

遺著より觀たる

## 本邦醫人列傳

橋本俊正著

本書は日刊日本醫事日報主筆である橋本俊正氏がその餘暇を利用して主として同誌上に發表したものを取纏めたものである。書名に表はされてゐる通り、掲ぐる所の醫人傳たるや殆んど、多方面に亘る參考書、系譜、墓誌、その他の實物資料を渉

獵して纏められたる著者独自の境地になるものであるとも言ひ得る。即ち刀圭家として見たる醫人の傳記たるのみならず、一般讀者にも興味を感ぜしむる彼等醫人の遺著を考證せる文學的生活を経とし、古文書に現はれたるところに基づける彼等の履歷、生活の態容、或は特に興味深き挿話を緯としてゐるこにより此の書の讀まるべき範圍を廣めてゐるものである。主として維新前後より徳川末期に遡るまでの醫者に就いて書かれてゐる。純然たる漢法醫より漸次西歐諸國との交通の結果齎されたる醫術の進歩を記念する我國斯道の先覺者達の足跡をその遺著により辿つてゐるのである

ところで、現今に於てもメスとペンとは聯想され得る程斯道に文筆の士を多く見るのは世人のよく知つてゐることであらう。殊に徳川時代の末期に輩出した學者文人の輩に醫を業としてゐるものが如何に多かつたかは言ふまでもない。「醫を業とす」と言ひ「筆硯林池に親しめり」と言ふも、その然れが本業であつたかは辨じ難い位である。故に殊にこの書の如く遺著に従つて編まれたる醫人傳は、讀者の刀圭に興味、係纏を有する否とを問はず、文に興味あるか若しくは傳記に興を覺ゆるの人人には廣く歡迎されるべき書物である。書中乗ずる醫人は、伊藤玄朴、牧春堂半橋、杉田玄白、淺田宗伯、高野長英、箕作阮甫、緒方洪庵、大槻玄澤、大槻馨漢、橋本左内、橋本彦也、佐藤信淵、前野良澤、吉益東洞、桂川甫周、光藤阮岱、宇田川玄眞、華岡青洲、坪井信道、賀川子玄の二十一人であつて、單に醫人の名をもつて呼べるべきに非ざるの人多く見るのである。即ち國手の文字を眞に體せるの士ばかりである。

著者の簡決直截なる文も亦大いに好く、これら青史上不朽の偉人を描くにふさはしく、開卷より最終の頁まで一氣に讀まじむる力がある。

卷中、淺田宗伯、杉田玄白、高野長英、前野良澤

大槻玄澤、同盤漢、橋本左内等は、師弟 友朋父子等の關係に立つもので、相共にその一生を刀圭界に杏林界に我國文化の開發に努力した狀が極めて明瞭に知られ、國事漸く多端の秋に於いて志士として或は學者としての生活が讀者を打つものが多い。

中に含まれたる簡約にして明哲な文になる挿話も此種考證的な文が噴氣を催ひ勝であるのをよく引緊めてゐる。曾つて橋本左内が國事に東奔西走してゐた頃、一日西郷南洲と會見した時のこゝや、大阪の國手として知られた東儒緒方洪庵の塾に、橋本左内、大島圭介、佐野常民、大村永敬、長與專齊、箕作秋坪、福澤諭吉、武谷祐三、久保良造、西川元正、高安圓山、池田謙齋、戸塚文海、足立寛、久坂玄瑞、大村益次郎、武田斐三郎、村上代三郎、花房義賢、野盛亭、等の逸材秀賢が競つて學んでゐた有様など殊に面白いと思つた。その當時、晨に採薪に努め、夕に殘燈影暗き塾にあつて几座論講して孜孜としてつとめ、他日明治維新前後の文化史上に缺くべからざる大いなる役割を演ずるに到つた是等書生たちを想ふとき感慨の深いものがある。

これ等刀圭家が、或は愛國者として、或は文人として、或は革命家として、或は佐藤信淵の如く農政家として、また兵學者として、史學家として、時にふれ、機に臨みて詠むた詩歌、俳句等の引證も亦多く、生彩を添へてゐる。各人の著書名に到つては殆んど細大漏さず記して専門に研究せんとする人人に取つても貴重なる文獻たることを失はない。遂に一箇の醫書に非ずして寧ろ純然たる傳記的著述で、徳川末期の内外事情の裏面史とも見られるものである。敢て紹介する所以である。

(四六版百二十一頁、定價上製壹圓五拾錢、並製九拾錢、大阪市東區高麗橋町一八日本醫事日報社發行) M・S生

千里山俳壇 朝冷選

專文 野本夜詩雄

野分する川邊に牛の吼ゆる哉  
朝の雨に打たれコスモス散りにけり  
鳴子引く窓を埋むる稻穂哉

專文 三品金行

病癒えて爪つむ縁や山澄みぬ  
病癒えて秋の大鐘つきにけり  
木枯に山あらはなる破璃戸かな  
火桶圍むで餅焼く山の時雨哉

千里山大學祭にて

竹めば秋草匂ふ千里山

英法 津田道之助

秋晴や水泡立てて棹を引く  
木犀や新になりし大鐘樓

豫二 藤枝まさを

日鈍く築地くづれて葛紅葉  
さらく木の葉散る夜の秋しぐれ  
芋畑に蟋蟀鳴きぬ星月夜

南 甫

秋水に影おこし鳥の飛びにけり  
秣切る納屋のくらみの虫の聲  
名月や畦のまがりの地藏堂  
秋雨に伸びひろごりし煙かな  
縁に飛びし爪しろしるさ秋の雨  
街角にビラ撒く男秋の風  
鵬猶る山畑に葱引きにけり  
二三人砂山にゐる秋の風  
秋天に煙突を塗る男哉  
秋天を見てあれば鐘の鳴りにけり

追加 朝冷

菊咲いて南山晴るる日なる哉  
菊三鉢並べて縁の狭き哉

當季雜詠募集

用紙半紙、封皮には必ず「千里山俳句」を朱記の事

締切毎月二十日

送稿先

兵庫縣(青屋局區内)深江

有田朝冷宛

千里山歌壇 編輯局選

雜誌部主筆學友會

委員招待會にて 村上教授

千里山春の草みなすくく伸びゆく心君な忘れ  
そ

△別 離 珠川俊一

からからと銅羅のひびけげ今更に別れしみじみ思  
ほゆるかな  
只一人君を送りて泡立てる船あま見ゆるわびしき  
思ひ

△逃 避 川原美佐緒

おほかたの人と生くるに疲れては或る日ひそかに  
君を戀ふなり  
人と生くる此のかなしみもなくがな書には戀も  
思はじものを

なりはいの悔しさこめて今宵亦君に知られぬこひ  
ぶみを書く

△悲しみの日 高原草路

學校の子供等あまたつごひたりその友だちの葬式  
の日に

じき友の柩をめぐる子供等のななき顔に沈む秋  
の日

秋風の草葉を拂ふ海岸にわが教え子のひつきは立  
てり

△母と子 藤村まさる

いつしかにかたみに容れぬ世を生きて此の母と子  
の一つ家に住む

△女 學生 田中延雄

人知らぬこころを笑ひて止まぬ子よ若ささほどに嬉  
しきものか

△十 月 鈴木たけを

病み給ふ父が心の寂しさの胸に沁み入る秋の雨か  
な

△旅 にて 徳久俊次

十月の朝の光のつめたさに相見し瞳ようら寂しけ  
れ

△旅 にて 徳久俊次

ふりしきる時雨の中をひた走る小牛のすがた愛づ  
べかりける (高原の牧場を雨中に通じて)

△旅 にて 徳久俊次

かなかなと啼くひぐらしにほかななる疲れ覺えり  
夕暮の道

△旅 にて 徳久俊次

うすぐらきランプの光見てあれば幼き日の夢思ひ  
出でにき (未だ電燈なき宿屋につけり)

△影 霜村生

人人の住める島かもおちこちにこもしびの見ゆ内  
海の中に

△古 寺

吾とわが身を賣りてかるがるくおごけを言ひし後  
のみぢめさ

△古 寺

ゴシゴシこすり見しかご吾が靴は悲しや破れて  
出る艶もなき

△古 寺

陽を浴びて端居し居れば椽の上を木目傳ひつ蟻這  
ひてあり  
詩も歌も忘れ果てにし日頃をば静かに思ふ御寺に  
あれば  
汗ばめる肌に触れつつ深山路の風冷冷と奥津城に  
吹く

(第一七頁より續く)

福島辯論部報

去月十七日正午より時事新報社後援の下に全  
國學生雄辯大會を中央公會堂に於いて開いた  
當日は晝の部に於いて例年の如く雄辯大會を  
開催する代りに「陪審法模擬裁判」を公開し午  
後五時より各大學専門學校出演辯士は各その  
熱辯を奮ひ、聴衆また堂に満ちて頗る盛會で  
あつた。

防長會秋季懇親會

千里山學舎に於ける防長會會員は去月十六日  
(土)午後七時から、天神橋五丁目赤玉に於て  
秋季懇親會を開催した。會する者山本祥一君  
を始めとして十五人許、溝口幹事司會の下に  
福田會長、新町名譽會長の挨拶があつて、宴  
に移り、各自胸襟を開いて快談交り、興に  
乗じて立つて舞ふもあり、十分の歡を盡した  
斯くて十時過に到り學歌を合唱して解散した  
因に當夜招待してあつた本學事務理事宮島教  
授の出席を會員一同冀望してゐたが、同教授  
が學務多端の故をもつて参加する事能はざり  
しは會員一同の遺憾とする所なりし由。(新町  
講師報)

東北、北海道縣人會例會

千里山學舎に學ぶ學生であつて東北地方及び  
北海道出身者より成る同會では去る十月七日  
午後二時半から千里山學舎食堂に於いて第二  
會例會を開いた。北海道出身の武内教授、宮  
城縣出身の大立目講師、田中軍事教官始め増  
子一巳、松本政夫、佐藤進吾、阿部一雄、勝  
又愛憲、加藤昌秀の諸君出席し、歡談を交へ  
て薄暮解散した。



(第十六頁より續く)

監視員(校友)——松川一男氏、山村繁氏、三宅次郎氏、井阪恭一氏、徳竹要氏  
計時員(學生)——西村壽隆君、門脇治郎君、津田晴一郎君、矢紫春雄君  
記録員(學生)——久保英一君、竹割寅之助君、鈴田貞之君、五百城一三君、小森龍君、木下尙武君、櫻井敷枝君  
通告員(學生)——入江二郎君  
召集員(學生)——澤田捨次郎君、田中重君、矢作君、小寺善次郎君、陸山昇君、豊田一枝君  
他校選手係(學生)——松葉徳三郎君、加藤美史君  
競技進行係(學生)——高橋康夫君、片淵昇君、西田利廣君、小林元二君、川村善助君、檀上君、能勢清和君、川西武治君、永田登君、淺野秀夫君、長谷川稔君、三木忠章君、中川英一郎君  
新聞記者係(學生)——有賀次郎君

### ルイ・ストロース翁の訃

昨年十月二三日に、本學福島學舎を訪ふて「Economic Situation of Europe」なる題下に一場の講演を試みられた、ベルジウム國最初の駐日領事として有名なルイ・ストロース翁は、去月三十一日享年八十三歳の高齡を以て、ブラッセル市で逝去された。因に同氏來學當時の詳報、同氏の講演中の照影、竝に最近までのその略歴等は、本誌第三十四號(大正十四年十一月十五日發行)第一二頁、第一八頁を参照せられたい。(この項、歐米の學界)

### 學生小山龍男君の訃

本學大學豫科第三學年學生小山龍男君は去月二十六日急病にて長逝した。ここに謹んで弔意を表する次第である。

(この項「學生彙報」)

## 校友諸氏に告ぐ

大正十五年度關西大學校友會會員名簿は本月末日愈出來致す筈に相成居候間御入用の方は實費金參拾五錢相添へ本會宛て御申込下され度候

大正十五年十一月

大阪市此花區上福島

## 關西大學校友會

## The Kansai University Bulletin

Published Monthly By

## The Kansai University Press

No. 44

October, 1926

### LEADING FEATURES OF CONTENTS

- Address "Be Strong Mentally & Physically" ..... President, J. Matsumyto.
- Address "Training Physical & Mental" ..... Chancellor, J. Yamaoka.
- Literature as a Social Phenomenon ..... Prof. N. Katagami.
- University News—Construction of the University Main Building Began—Students' Club Completed—Visit of Journalists to Senriyama—Appointment—Holding of the University Festival—The 26th "Application of Theory to Practice" Lecture Meeting—The 27th "Application of Theory to Practice" Lecture Meeting—Personal Notes.
- News from Abroad—On the late Prof. Knapp.—Friedrich List Gesellschaft—Death of Louis Strauss.
- Alumni News.
- Students Activities.
- Miscellanea.
- Illustrations—The University Festival at Senriyama—Inauguration of the University Stadium—Prof. N. Katagami—Mr. J. Togawa, Alumus—Lectures Commemorating the First University Festival—Exhibit of Literatures at the University Festival—The President Cutting The tape on the Track—Stadium-Stands Covered with Lookers—On—Imperial University and Mikage Normal School Runners Winning the Day.

## 十二月號休刊

例年の通り本誌十二月號は休刊し第四十五號は大正十六年一月一日附を以て十二月末に發行するに  
こと致します

### 不許複製

大正十五年十一月十三日印刷  
大正十五年十一月十五日發行

編輯兼發行人 辰巳經世  
大阪此花區上福島北二丁目  
印刷者 飯田彌之助  
大阪此花區土佐堀通四丁目五番地  
印刷所 株式會社三有社  
大阪此花區上福島北二丁目  
發行所 關西大學學報局

福島學舎 關西大學  
大阪此花區上福島  
電話 土佐堀一〇四九  
電話 吹田一五七〇九  
千里山學舎 關西大學  
大阪此花區上福島  
電話 吹田一五七〇九

### 關西大學校友ソノ他關係者各位へ

●千里山學報維持費トシテ、校友ソノ他關係者各位カラ續續多額ノ御出捐ニ預リ有難ク幾重ニモ御禮申上ゲマス。

何時モ申上ゲテキマス通り、出來ルナラハ每號無料デ御配付申上ゲルノガ本意デアリマスガ、今ノトコロドウシテモ各位ノ御援助ニ俟タナケレバ、到底發行ヲ續ケテ行クコトノ出來ヌ状態ニアリマスノデ、遺憾ナガラ不遠慮ニト言フヨリモ寧ロ進ンデ御寄捐ヲ仰イデキル次第、何卒惡シカラズ御諒恕ヲ願ヒマス。

●金額ハ各位ノ御志ニ委セル外ゴザイマセンガ、大體年額貳圓位御寄捐願ヘマスレバ收支相償フ旨申添ヘテ置キマス。但シ集金郵便ニテ御拂込下サル方ハ勝手ナガラ一年半分若クハソレ以上トシテ金額參圓以上ヲ御申込ミ願ヒマス。

●從來御出捐願ヘナカツタ方ニ、コノ際何分ノ御援助ヲ御願ヒ申シ上ゲマス。ソシテ新タニ御出捐下サル方ハ、御手数數デスガ左ノ申込書ヲ御切り取り下サイマシテ、金額ナリ拂込方法ナリ適宜御書入ノ上御送付願上ヒマス。

●尙ホ、一年以上繼續御送申上ゲテ井ル方デ、今尙ホ御出捐ガナク、且ツ維持費ニ付テ何等ノ御通報ニモ接シナイ方ハ、或ハ送付先ニ現住サレナイノデハナイカト存ジマスカラ、今後發送ヲ見合セルコトニ致シマス。

大正十五年十一月

關西大學學報局

### 千里山學報維持費拂込申込書

住所

年度

科

名貴

金額

一金

拂込方法

振替貯金又ハ郵便爲替

集金郵便

(何れか一方を抹消して下さい)

關西大學  
關西甲種商業  
指定

# 山本靴店

大阪市此花區上福島北一丁目  
(但淨正橋筋大和田銀行前)

文房具、制帽  
雜貨、食料品

## 關西大學給品部

千里山學舍學生控所  
福島學舍學生控所  
内

關西大學教授 宮島綱男先生著

# 經濟學原理

(卷上)

菊紙約三總  
數約百七十  
コロタイプ刷肖像數  
料價金參圖五拾八錢  
送定料金拾八錢

## 下卷 近々發行

著者が其透徹せる推理力と豊富なる語學力とを以て研鑽潛思幾年の後遂に成つたもの即ち本書である。堂堂一般經濟の原理を論じて照合するところ古今東西の史實、學說に亘り而かも之が嚴精なる批判檢討を通して導き出だせる結論を更に一步現代の經濟事實に近附けたる點に於いて學界稀に見るの好著である。行文平明にして正確、敘述亦繁簡其宜しきをを得て經濟學を正しく理解し現時行はるる諸種の學說に對して相當の批判力を得る爲めには先づ第一に讀まるべき書物である。加ふるに各節末には詳細なる參考書目を掲げて讀者將來の研究に便し書中引用するところの學說に關係深き學者の肖像を十數葉の鮮麗なコロタイプ版として挿み裏面に其傳記を附して、學說と時代の交渉並びに學說夫れ自身の印象を一層深からしめんと努めてゐる蓋し經濟學史としても一の纏つた好參考書である。尙ほ本版には書中引用せる學者のインデックスを付し且つ第一、第二に洩れたる又は其後公刊せられたる參考書の目録を増補した。敢へて大方に獎む。

東京市神田區錦町一丁目二番地  
發行所 瞭文堂  
攝巷東京一〇三六番・電話五五〇一  
大阪市西區阿波堀通四丁目  
大阪大寶文館株式會社發行所  
攝巷大阪三四番・電話三三〇三

關西大學 關西第二商業指定  
同 關西第一商業指定  
關西甲種商業

### 明文堂 野島書店

大阪市此花區上福島北三丁目  
電話土佐堀 一二八六番  
振替大阪 三九九九一番

本學校友 野島藤次郎

## 第一部(甲種)——晝間部五ヶ年制

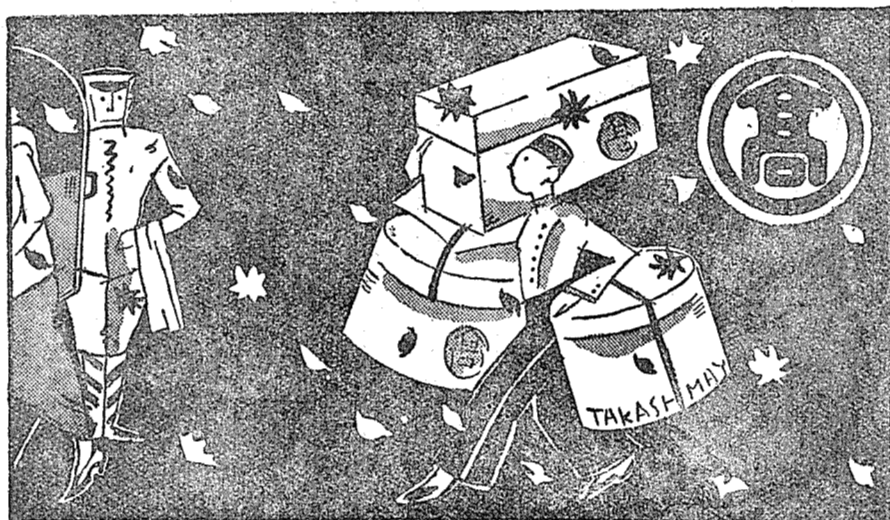
第一學年・第二學年各補缺若干名

## 種甲 北陽商業學校生徒募集(文部大臣甲種認可及指定)

## 第二部(甲種)——夜間部四ヶ年制

第一・第二・第三學年各補缺若干名

大阪市東區淀川區新庄  
電話北七五七五番



お早く・お手軽に・便利に

お買物の調ふ……………高島屋

配達は極めて迅速に

各種品揃ひ

- 一階 化粧品 食料品 傘 履物類
- 二階 木綿洋反物 文房具 玩具 運動具 靴類
- 三階 呉服 絹着尺類 廣帯 片側帶 染物部 仕立上品
- 四階 洋服 雜貨 貴金屬 美粧部
- 五階 マーケット賣場 家具裝飾部
- 六階 美術部 支那部 催物場
- 七階 日用品 家庭用品類 食堂
- 八階 寫真部 展覽場 お子供遊場

お急ぎの冬のお仕度は……………高島屋で



大 阪

高島屋